広瀬青波訳『パスカルのパンセ』

紹介者まえがき

（I） ここに資料として紹介する，広瀬青波訳『パスカルのパンセ』は，雑誌『日本及日本人』(政教社) 524 号（明治 43 年1月1日）より，546 号（同年 11 月 15 日）まで断続的に連載された。各断章には一から二百四十三までの通し番号がつけられているが，途中数字の誤記がある（二百三となるべきところが二百十九となり，それに後続の番号が従った）ため，実際の断章数は計 212 である。

各断章の掲載号は次の通りである。

断章一～十五. 524 号（明治 43 年1月1日）pp. 206～208.

断章十六～三十. 525 号（同. 2 月 11 日）pp. 80～81.

断章四十二. 532 号（同. 5 月 1 日）pp. 71～75.

断章四十三～六十八. 537 号（同. 7 月 15 日）pp. 92～97.

断章六十九～九十九. 538 号（同. 8 月 1 日）pp. 74～77.

断章百～百二十. 539 号（同. 8 月 15 日）pp. 94～97.

断章百二十一～百四十九. 540 号（同. 9 月 1 日）pp. 81～84.

断章百五十～百六十四. 543 号（同. 10 月 1 日）pp. 92～95.

断章百六十五～二百二. 544 号（同. 10 月 15 日）pp. 75～79.

断章二百十九～二百三十二. 546 号（同. 11 月 15 日）pp. 85～88.

ここに資料として複刻紹介するのは，以上の掲載分すべてである。第一回目を除いては，標題を省き，各断章に，広瀬青波が底本とした Brunschvicg 版（B と略記）の断章番号をそえ，縦組を横組に変えたが，それ以外は，原文にいっさい手を加えていない。但し，明らかに誤植と思われる数箇所については資料の末尾に簡単な校訂表を付しておいた。上記の掲載号の大部分は，国立国会図書館に蔵されているが，525 号が欠本であり，537 号の pp. 81～94. が落丁となっている。以下の複刻はだいたいは国立国会図書館蔵本により，525 号を日本近代文学館蔵本により，537 号の pp. 81～94. を早稲田大学図書館蔵本によった。ご協力頂いた三図書館に厚くお礼を申し上げたい。ちなみに，全国大学図書館で『日本及日本人』の明治期のバックナンバーを相当数まとめて所蔵しているのは，唯一早稲田大学図書館のみのようであるが，これも残念なことに『パスカルのパンセ』掲載号に関しては多くの欠本がある。

(II) 翻訳底本には，Brunschvicg 版が用いられた。当時広瀬青波が手にすることが可能であった，Brunschvicg 版には，次の二種がある。

A. Blaise Pascal. *Opuscules et Pensées,*

(2 版以後, *Pensées et Opuscules*) publiées avec une introduction, des notices et des notes par Léon Brunschvicg. Paris, Hachette. 1897 (明治 43 年 (1910) まで数版を重ねているが, texte の上での異同はほとんどない)。

B. *Pensées de Blaise Pascal.* Nouvelle édition collationnée sur le manuscrit autographe et publiée avec une introduction et des notes par Léon Brunschvicg. Paris, Hachette. 1904. 3 vol.

上記の A, B. の éditions は, 《Pensées》のテキストに関するかぎりほとんど異同がないので, 広瀬青波がどちらを底本としたかを明らかにすることはできない。ただ, 《Pensées》断章の中のラテン語の広瀬訳が, A. の édition の註に付された仏訳によっているように思われること, また A. の édition が当時もっとも普及していたことを記しておく。

(III) 翻訳された断章は Brunschvicg 版の Section I, Section II, Section III に収められている, 総計 233 の断章から選択された計 199 の断章である。訳出順は Brunschvicg 版の断章配列に従っているが, ただ一カ所, B. 85 と B. 86 が前後して訳出されている (広瀬四十五と四十六)。B. 139, B. 172, B. 194 の各断章は, いずれも広瀬によって二箇以上の断章に分けられて翻訳されている。B. 228 と B. 229 はまとめて一断章 (広瀬二百二十八) として訳出され, B. 83 の訳文の冒頭には B. 82 の末尾が訳されて置かれている (広瀬四十三)。また広瀬百三十一は, B. 166 の訳であるが, それに加えて Brunschvicg 版の note にある, Chevalier de Méré の引用 (Maxime. 67) と La Rochefoucauld の引用 (Maxime. 21) が並べて訳出されている。なお, 翻訳は各断章の完訳を意図しているように思われるが, ひじょうにしばしば欠落部分が認められ, B. 233 は, 前半部が訳出されているにすぎない。また, 明らかな誤訳と認められる箇所もけっして少なくない。しかしこれらの点は, 現在ももっとも流布している Brunschvicg 版との対照によって簡単にわかることであるので, 詳しい註記はしないこととする。

(IV) 広瀬青波については現在のところ不詳であるが, 慶応大学でフランス文学を講じベルクソン, テーヌ, ブールジェ等の翻訳で知られる広瀬哲士教授 (1883～1952) の若き日の筆名ではないかと推定される余地がある。その理由は次の通りである。雑誌『日本及日本人』556 号 (明治 44 年 4 月 15 日) から 3 号にわたって, 広瀬青波は「平和と平和主義」の題の下に Emile Faguet の《Pacifisme》の紹介を行なってフランスの政治思想について論じ, また同誌 560 号 (明治 44 年 6 月 15 日) から 582 号 (明治 45 年 5 月 15 日) まで断続的に「演劇雑話」23 回を発表してフランスの演劇について述べている。ところで, 昭和 5 年に発行された, 広瀬哲士著『新フランス文学——ナチュラリスムからシュルレアリスム』(東京堂) には, フランス演劇に関して 80 頁余の論述があり, その内容には, 前述「演劇雑話」と相似た部分がある (たとえばフランソワ・ド・キュレルや『巴里生活』紙の紹介など)。また広瀬哲士は, 昭和 9 年に五来欣造と『政治思想』(「現代政治学全集」第二巻・日本評論社) を共著し, 「仏国政治思想——王党主義の立場に於て」の題の下に, フランス政治思想の歴史的展望を行なっている。この論稿は内容的には広瀬青波の「平和と平和主義」と共通した部分はないとは言え, 哲士, 青波ともにフランス政治思想に関心を抱いていたことは注目してよいと思われる。

また広瀬哲士は明治 43 年4月より慶応大学で教鞭を取られているが，前記「演劇雑話」の中に，『三田評論』誌への参照が見られる。これに加えて，ご健在の広瀬哲士夫人のご記憶によれば，広瀬哲士教授が『日本及日本人』に執筆されていたことは確かであるという。

もし，広瀬青波＝広瀬哲士であるならば，『パスカルのパンセ』の翻訳は，広瀬哲士教授が東京帝大仏文卒業後の，27 歳頃のお仕事ということになる。

(V) 広瀬青波訳『パスカルのパンセ』は，従来日本のパスカル研究者の間ではほとんど知られていなかった。明治期の翻訳文学研究の大家であられた，柳田泉先生も，その訳書『パスカル感想録』(大正 12 年．文明書院）の凡例に，「国訳には先進前田越嶺氏の訳と加藤一夫氏の訳とあるが…」とだけ記して，広瀬青波には触れておられない。増田良二氏の調査によれば，昭和 14 年7月 16 日号の『日本カトリック新聞』に掲載された，柳川如安「パスカルの『パンセ』について」という記事の中に，次のような一節がある。「……『日本及日本人』に広瀬青波と云ふ人が『パスカルのパンセ』の題で寄せた邦訳……私の手に入れたのは何回分のものであったか解らないが，「百二十一」から「百四十九」までの句番が附してあるから恐らく全訳の企てではなかったかと考へられる……」(「カトリック研究」昭和 15 年 11・12 月号．特輯　パスカル研究．東京　カトリック研究社，増田良二編「ブレーズ・パスカル書誌」p. 16 に引用)。しかし，この柳川如安の言及は現在までのところほとんど忘れられているかにみえる。『パスカル全集』(人文書院　昭和 34 年）や，『世界の名著　パスカル』(中央公論社　昭和 41 年）に付されている文献目録に，広瀬青波の名前は現われていない。

(VI) 《Pensées》の断片的翻訳・紹介は，すでに明治初期から，たとえばキリスト教関係の雑誌などに掲載されていたと推測され，増田良二氏も，明治 23 年7月5日に発行された，カトリック系の『公教雑誌』第 17 号東京公教雑誌社に，訳者不明の《Pensées》断片の翻訳（約 1000 字）を発見しておられる(『望楼』第 10 号　昭和 23 年 10 月　東京ソフィア書院　増田良二「明治カトリック文学覚え書（一)」．p. 28.）が，まとまった数の断章翻訳という点から見れば，広瀬青波訳『パスカルのパンセ』は，《Pensées》の本邦初訳であると言ってよいと思われる。

(VII) 終りに広瀬青波の身許調べのためにいろいろとご迷惑をおかけした，広瀬哲士夫人，荻原井泉水氏，パスカル研究家増田良二氏，フランス文学者の太宰施門先生，内藤濯先生，佐藤朔先生，演劇評論家石沢秀二氏，慶応大学図書館参考室羽田嬢の皆様に心からお礼を申し上げなければならない。また，『言語文化』にこの資料紹介の場を設けて下さった一橋大学語学研究室の皆様，とくに同語学研究室運営委員の皆様と『言語文化』本号の編集を担当なさった久保内端郎助教授に深い感謝の意を表したい。　(広田昌義　記)

パスカルのパンセ

廣瀬青波譯

パスカルのパンセは佛蘭西文學中の珠寶なり。すべて拾四篇九百二十四章　今より漸次之を抄譯せむとす。拙譯固より完きを望む能はず，切に大方の是正を乞ふ。

第一篇

一　(B. 4)

眞の雄辯は雄辯を嘲る。眞の道德は道德を嘲る。乃ち判斷の道德は知の道德を嘲る。何となれば判斷に感情の屈すること恰も學問が知に屈するが如ければなり。妙想は判斷の部なり。幾何は知の部なり。哲學を嘲るは眞に哲學を行ふものゝことなり。

二　(B. 6)

人は知を害ふが如く，また情を害ふ。人は談話により知と情とを作る。人は談話により知と情とを害ふ。其善きと惡しきにより或は作り或は害ふ。されば之を作り之を害はざらむが爲に選擇を爲すを要とす。既に之を作り未だ之を害はざるものに非れば選擇を爲す能はず。斯くして一の圈を成し，此より出づるものは幸なり。

三　(B. 7)

知を獲るに從ひ益〻眞人は發見せらる。平凡なる者は人の間に差あるを認めず。

四　(B. 8)

晩課を聽くが如く法話を聽く人多し。

五　(B. 10)

通例人間は他人の頭腦より生じたる理よりも自己の發見したる理によりて口說き落さる。

六　(B. 11)

總じて大なる悅樂は基督敎生活にとりて危險なり。然れども世が創り出したる悅樂の具中，演劇程怖る可きものはあらざる可し。そが人の心を動かし吾等が胸に燃ゆるが如き情を惹き起さしむるものは眞に人情の自然にして微妙なる描寫演出を爲したるものに在り。取り分け戀愛の場合之を甚だ淨く且は極めて眞摯に演じたる時に於て然り。何となれば聖き人に聖く見ゆれば彌が上にも其心は感動するに至る可ければなり。其狂暴吾等が自我に喜ばる，これはまたいしくも演じられたると同じ功果を惹き起さんとの欲念を作る。同時に此處にて見たる情緒の眞摯なるが上に築きて一の良心を形づくるこれは汚れ無き心より恐怖の念を拂ひ去り，自己に賢しと見たる戀を愛するは純潔を壞るものにあらずと考ふるに至らしむ。

斯くして人はあらゆる美しさに心を埋め戀愛の甘さに包まれ劇より罷り歸る。靈と知は其汚れ無きを諒し果ては人々各初めての印象を享けむと思ひ或はかの劇にて見たる巧みに描かれたりしと同樣の快樂と犧牲とを獲むがため何人かの胸にこのものを生せしむる機會を索むるに至らしむ。

七　(B. 12)

スカラムーシユは唯一事をのみ想ひ回らす人間なり。悉く語り了へたる後尙十五分を語り續くる博士は飽くまで喋舌りたき念に滿てる人なり。

八　(B. 17)

川は進む道なり，而して人の行かむと欲する所に導き吳るゝ道なり。

九　(B. 19)

一の作を成すに當り人の思ふ最後の事は如何に冒頭を始めむかを知る事なり。

十　(B. 22)

「吾は何等新しき事を言はざりき」と人をして言はしむる勿れ。材料の配置新しきなり。掌上に弄ぶに方り甲乙の操る球は乃ち一なり。然かも最も巧みに持するものに至りては一人なり。

十一　(B. 23)

並べかたの異なれる文字は異なりたる意味を成す。列べかたの異なれる意味はまた異なれる結果を致す。

十二　(B. 25)

辯論——快味と眞實とを要す。然れども此快味たる，事實より獲來りたるものならざる可からず。

十三　(B. 26)

辯論は思想の活寫なり。活寫したる後尙附加する所あるものは眞景に非ずして畫圖を成すものなり。

十四　(B. 30)

人は耳とのみ相談す，心を缺けばなり。

十五　(B. 32)

快と美には一定の規範あり。之は吾人の弱き或は强き性の間にある一種の關係より成立す。

此規範に基き作られたるものは凡て吾人を快からしむ。歌謠，建築，演說，韻文，散文，女，鳥，川，樹木，居室，衣服等皆然り。此規範の上にあらざるものは凡て勝れたる趣味を有てるものゝ意に叶はず。

類を異にするも同一の規範に類似するが故に良き規範の上に作られたる歌謠と建築との間には充分なる關係あるが故に惡しき規範の上に作られたる物の間にも齊しく充分なる關係あり。惡しき規範は一定せるにあらず，限り無ければなり。然れども，例へば誤れる規範の上に作られたる惡しき歌は其規範に則り裝ひたる婦人と全く相似たり。

如何に誤れる歌謠が滑稽なるかは，能く其性質と其規範とを考へ，次に其規範の上に作られたる婦人若くは家屋を想像するより能く了解せらるゝこと無し。

十六　(B. 33)

詩美——詩美といふが故にまた幾何學美或は醫學美と稱し得るが如し。然かも人之を云はず。其理由は，幾何學の對象は何なるか，及びそは證明により成立すること，或は，醫學の對象が何なるか，及びそは醫療により成立することを人熟知し居ればなり。然れども快は何により成立し或は，詩歌は何を以て其對象となすかを人熟知せず。乃ち形どる可き自然の規範なるものを知らず。而して此知識無きが故に人は若干の不明瞭なる語を發明したり。人は此隱語を指して詩美といふ。

然れども此規範の上に在る婦人を想像し得るものは，金銀珠寶を以て飾りたる婦女を見，之を嘲るならむ。是れ婦人の美は何により成立するかてふ事を詩美が何により成立せるかてふ事よりも能く解し居ればなり。然れども此事を解せざるものは裝飾の故を以て婦女を嘆美するものあらむ。加之誤つて彼女を指して女王となす村邑も亦少からざる可し。この故にその規範に則り作られたる歌謠を「田舍の女王」と稱することあるなり。

十七　(B. 34)

詩人，數學者などゝいふが如き各〻の看板無からむには詩歌若しくは其他のものにより有名ならむと欲して世に出づるものあらざる可し。然れども常人は看板を欲せず。詩人の天職と縫箔師の職との間に殆ど差別を認めず。

常人は詩人と稱せられず，また，幾何學者とも稱せられず然れども何人を問はず何れも詩人たり，また幾何學者たり，而して何人も其人として萬事を判斷す。然かも人は渠等を更に辨ぜざるなり。渠等きたるや人の語りし事を語るならむ。人は渠等の間に，用ふ可き必要を措いては更に甲乙の質を認めず。然れ

ども此時人はそを想ふ可し。齊しく其質を有すと雖も只言葉を以てす可き問題ならざる時，渠等は善く語ると人をして言はしめず，言葉を以てす可き事ならば渠等は善く語ると人をして言はしめん。

或人きたる時其人詩歌には甚だ巧なりと云はゞ誤れる賞讃の辭を與へしものなり。

十八 (B. 35)

「渠は數學者なり」とか「演說者なり」とか或は「雄辯家なり」等と人をして謂はしむることなからむを要す。唯「渠は眞摯なる人なり」と言はしめよ。此一般的なる名こそ最も余が意に適ふものなり。某人を見て其人の書を想起さしむるは良からざる徵なり。余は，人が其能を用ふる時を措いては其能を認められざらむことを希望す。一能を以て其人全部を蔽はむことを怖るればなり云々。

十九 (B. 36)

人は欲求すること極めて多し。總て之等を充實するものを喜ぶ。「立派なる數學者なり」と人は云ふならむ。然れども予にして數學のみ爲さば人は予を一個の命題と誤らむ。「堂々たる戰士なり」と云はゞ予は武裝したる地所と誤らむ。さればあらゆる吾欲求を普遍的に充實せしめ得る眞摯なる人間を要するなり。

二十 (B. 37)

人はよろづに通じ，萬事に就き知り得らるゝことを悉く知るを得ざるが故に萬事に就き少し宛を知る可し。何となれば一事を悉く知るよりはよろづ些少ながらも知るを甚だ可しとす。此普遍なること最も善し。若し兩つながら有するを得ば益ゝ可なり。然れども，若し撰ぶとせば前者を撰ぶ可し，而して世間は之を感じ，之を爲す。世間は屢ゝ善良なる判斷なり。

二十一 (B. 38)

詩人にして眞面目なる人にあらず。

二十二 (B. 41)

人は惡戲を好む。而かも獨眼者若しくは薄倖人に對してにあらず。幸福にして高き者に對してのことなり。

生慾はあらゆる吾人の運動。人道等の根原なり。

人たる感情とやさしき情を有てる者ゝ意を迎ふるを要す。

二十三 (B. 44)

汝を善きやう人の思はむことを欲するか。然らばそを云ふ勿れ。

二十四 (B. 46)

善き言葉をいふものは惡しき性質なり。

二十五 (B. 47)

善く語りてよく畫かざるものあり。場所などの助くるものありて語る者を暖むるなり。而して此熱無ければ見る可からざる多くの智慧を引き出すなり。

二十六 (B. 50)

同一の意味も之を表す言葉によりて異なる。意味は言葉により威嚴を加ふ，威嚴を言葉に與ふるにあらず。先づ其例を索めよ。

二十七 (B. 51)

頑迷なるものに向ひては懷疑者なり。

二十八 (B. 52)

デカルト派にあらざるものは何人もデカルト派と云はず。衒學者にあらざるものは衒學者を口にせず。田舍者にあらざれば田舍者と云はず。予は睹してレツトルオープロヴアンシアルの表題にそを置きたるは活版屋なりと曰はむ。

二十九 (B. 56)

推量するは「汝を喜ばしめざる所」なり。聖者は推量せらるゝを欲せず。

「不安に充てる心を持つ」といふよりは「予は甚だ不安なり」といふをよしとす。

三十 (B. 57)

「御苦勞でした」「御迷惑では御座いませんか」「餘り永すぎはせぬかと心配します」等の

挨拶を予は好まず。凡てこれ等は眞に然かおもはしむるにあらざれば或は人をして怒らしむ。

第二篇

三十一 (B. 60)

第一，神の無き人の悲慘。

第二，神と俱なる人の喜悅。

或は

第一，自然は腐敗せり。自然其自身によりて。

第二，償ふ者あり。聖書によりて。

三十二 (B. 61)

予は次の如き順序によりて此講演を成さんとす。あらゆる種類の境地にある虛榮を示さむが爲に一般生活の虛榮を示し，次に懷疑哲學の虛榮及びストイツク哲學生活の虛榮を示さむとす。然れども此順序は守られざる可し。予は少しく其所以を知れり。而して如何に少數人士が之を解せるかを知れり。人の學は何れも之を守る能はず聖トーマも之を守らざりき。數學之を守る。而かも深奥の點に於て無益なり。

三十三 (B. 62)

第一の序，彼自身の知識を論じたる者に就きて語ること。シャロンの分類は悲しましめ倦かしむ。モンテーニユの無秩序に就きて述ぶること。彼は眞直なる方法の缺點を感じたれば問題より問題へと飛び移りて其缺點を避け良き調を希へり。

自己を描くは愚なる企なり。偶然にてか若しくは己が弱點により愚なることを言ふは惡しき普通の事なり。然れども企みて愚なることを言ふは堪ふ可からざることなり。

三十四 (B. 63)

モンテーニユ。モンテーニユの缺點は大なるものあり。猥りなる文字。グールネー孃が兎や角言ひたれどもそは聊も價せず。輕信とは眼無き人の事なり。無識とは圓を四邊形になす人のことなり。世間は今一層大なるものなり。

自殺及び死に關する氏の感情。彼は恐怖の念，悔恨の情無く，濟度の無意義を鼓吹す。彼の書は敬虔の心に趣かしめむとて作られたるにあらざれば其方面に强らるゝこと莫し。然れども人は通例それより離隔せざるやう強らるゝものなり。吾人は，人生に於ける若干の事象に對して彼がやゝ放膽且放逸なる感情を有せるは恕す可し。然れども「死」に對し餘りに異端なる彼が感情は恕す可からず。何となれば人にして苟も聊なりとも基督敎的に死するを希はざるものあらば斯くの如き人は悉く敬虔の心を放棄し去るものなればなり。否ずむば彼は全く彼書によりひたすら下劣なる死を思ひ欲せるものなり。

三十五 (B. 64)

予が觀ずるすべてを見出すはモンテーニユの中に於てするにあらずして予自身の中に於てなり。

三十六 (B. 65)

モンテーニユに可しとせられしものは容易く獲らるゝものにあらず。予が以て怪しとなすところの彼の可からざるところは直ちに匡正せらる可し。若し人ありて彼は餘りに歷史を爲し餘りに自己に就き語れるを彼に告ぐる人あらんには。

三十七 (B. 66)

己を知らざる可からず。假令眞を發見するに用を爲さゞることある時と雖そは少くとも己が生活を規定するに與つて功あり。而してこれより正しきもの決してある可からず。

三十八 (B. 67)

外界事物の學は，懊惱の時心の闇を慰むることあらず。然れども心の學は形而學の足らざる時常に予に慰安を與ふ。

三十九 (B. 69)

讀むこと速に過ぐるか遲きに過ぐれば了解すること更に無し。

四十 (B. 70)

自然は吾人を正しく中間に置きたり。若し吾人にして衡の一端を變ずれば必ずまた他端を變ず。されば吾人は腦中に撥條を有し，其一に觸るればまた其反對に觸るゝ如く仕組まれたるにあらざるかを思はしむ。

四十一 (B. 71)

餘りに多く餘りに少き酒を彼に與ふる勿れ。彼は眞理を發見し得ざる可し。矢張り多量に與へよ。

四十二 (B. 72)

人間の無能力。玆に自然知識の吾人を導くあり。曰く，若し自然知識にして眞實ならずとせば，人に眞なるもの無し。若し自然知識にして眞實なりとせば玆に何等かの形式を以て頭を低るゝの餘儀無きに到らしむる一の大なる屈從命令者を認めしむるなり。而して人は此知識を信ぜずして生存し得ざるものなるが故に，予は人たるもの，更に大なる自然研究に入るに先ち一應，眞摯の態度を以て自然を考察し同時に自己を觀察し，如何なる階程に人間の位するかを考へむことを希望するものなり。請ふ，人をして高きに在つて全自然界を靜觀せしめよ，而して渠を圍繞する幾多の事々物々より其眼を離れしめよ。渠をして宇宙を永遠に照らす燈火の如く懸れる赫耀たる光を眺めしめよ。然らば此大地の如きは前者に比すれば小一點に過ぎず。而も其大塊また蒼穹に轉々せる諸星の抱擁せる大空に比すれば眇たる一粒に過ぎざるを見せしめよ。吾人の視力は漸く此處に止ると雖も吾人想像の力は更に超ゆること幾許ぞや。自然の供する所未だ幾ばくならざるに想既に疲れんとす。眼に映ずる世界は大なる自然の一部に過ぎず。思ふこと幾程なるも遂に近づく可からず。想像し得る空間を超えて我思ひを運ぶ能はず。無限の界に微細なる空間を作るに過ぎず。中心は隨所にありて外周は何れの邊にも索む可からざるスヘールなり。吾人の想像終に此念に入るはこれ全能の神の著るき最大性質なる所以なり。

人をして再び自己に還り現在如何なる價値に己の在るかを考へしめよ。渠をして自然より離れたる村邑に彷徨へるものとして見せしめよ。渠の宿れる密室よりして渠は大地を計上し王國を計算し都府を計り且また自己の眞價を計る。無窮の裡に在りて人は果して何なるものぞ。

然れども一個の更に驚くに堪へたる不思議を渠に示さむが爲に渠をして其知れるものに在りて最も微妙にして感覺を以て捉ふ可からざる底のものを探らしめよ。微塵虫は體の實に微小なるものなり。此虫をして渠に更に其小なる體に附屬せる關節ある脚を示さしめよ。脚には更に血管あらむ。血管は更に血液を有せむ。血液は更に其中に液汁を含まむ。液汁は更に滴に分つ可し。滴中更に蒸氣を有せむ。猶更に此最後の物を分てば此種の概念を以て遂に其力を消耗するに至らむ。而して其到り得る最後のものを捉へて吾人が爲せる論題の對象たらしめよ。然らば其處に吾人は形ある最小の物を認め得たりと考ふるを得む。是に至りて予は更に新しき深淵の其處に横はるを示さむと欲す。予は渠に啻に形而界而已ならず自然に就きて人の描き得る甚大の物と雖此微細なるアトム中に認め得らると謂はむと欲す。渠をして此處に無窮の宇宙を見せしめむ。此處にまた天地あり，遊星あり，形の世界と同樣の比を爲す。此天地にまた種々の動物あり，而してまた微虫あり。此微虫に於ても前者の與ふる所の物を見む。他にありても齊しく終止無く休息無き宇宙あるを認め甲が其廣大に於けるが如く乙は其微細なるに驚かるゝが如き不可思議中に沒し去らむ。唯吾

人の肉體をのみ貫するもの，或は宇宙の裡に認むるに足らざりしものも萬物の懷に其自ら入り來らば則ち人間の到達し得ざる虛無に對して現在或は巨像となり或は一個の世界となり或は寧ろ萬物其自身とならん。

斯くの如く考ふる人は自然に對し自己に就て恐怖を感ずるならむ。而して自然が渠に與へたる大塊の中に在りて維持せられ居るを思ひ，無窮と虛無の兩竅間に立ちて此等の奇蹟を眺め必ずや戰慄せむ。加之予は其好奇心が漸次感歎の念と變じ，自負の念を以て此等を研究せむよりも寧ろ沈默を守つて此等を靜觀するに至らむ。

自然に在りて人は果して如何なるものぞ。無窮に比すれば絕無を以て稱す可く，絕無に比すれば總てなり。畢竟無と有との中間に位す。外形を了解せんには餘り遠く離れて，萬物の終焉とそが原理は深く解く可からざる秘密の裡に在り。自己のよりて以て出で來りたる虛無を知り得ざるが如く自己を併呑し去る無窮をも解する能はず。

萬物存在の外面を認識し得ずとせば人は其原理をも終末をも知る能はざる永久の絕望中に在りて實に奈何せむとするか。萬物は無より生じて無窮に運ばる。誰か此驚歎す可き道程を辿り得るものぞ。此奇蹟を創造したる主にして初めて之を了解す。其他の輩は到底企及し得可きことにあらず。

此兩極を靜觀したる無き人間は假令其幾分の知識を有すといふと雖自然を研究するに甚だ覺束無し。此種の人にして其研究の對象と同じく限り無き頓悟速斷に依りて以て萬有の原理を解し總てを知得するの境に達せむと欲するは甚だ奇怪なりと謂ふ可し。何となれば速斷をも用ひず，無限の能力をも籍らずして其企圖を成就し得ざるは固より疑を容れず。

人學びて始めて自然が其姿及び造物者の姿を萬物に刻せるが故に萬物は殆ど何れも二重の無限性を有せることを知る。

吾人は總て學は其研究の範圍に於て無限なるを知る。例せば幾何學を疑ふものは開陳す可き無限の命題を有す。其命題たる其原則の數と微に於て無限なり。最後の爲に人が提供する所のものは其自身に依りて維持せらるゝものに非ずして必ず他に據るところあり，而して漸次他に及ぶを知らざるものありや。然れども吾人は形ある物に於けるが如く理に現はるゝものゝ最後を作る。性質上無限に分たる可き物と雖一應吾人の感官によりて捉へ得ざる不可見の一點を指して稱す。

兩極端の中大なる方は知覺し易きものゝ如し。デモクリトは「萬有に就きて語らん」と謂へり。

然れども無窮小に在りては認むること更に困難なり。哲學者は多く之を究めんと欲して何人も中道にして止む。

人は外周を有せる萬物の核心に達し得るは寧ろ當然の事と信ず。吾人が觸目し得る世界は吾人の力を超えて更に大なる外延を有すれども無に向ふ小なるものより見れば吾人之を超越せるが故に之等を所有し得るものと信ぜり。然るに有に向ふよりも無に向ひては小なる能力を有すれば足れりとするものにあらず。甲に對しても乙に對するが如く齊しく無窮の能力を要す。而して最終の原理を了解し得たらむ人は，必ずまた無窮に迄達し得るの人たらむ。甲は乙に據り乙は甲を導く。此兩極相觸接し，相合してまた遠ざかり，遂に神に到りて再び相合ふ。而して唯神に於てのみ。

されば吾人をして自己の能力を知らしめよ。吾人は或物なり，而して全部にあらず。無より生ずる第一義の原理の知識は吾人に無し。吾等の微小は無窮を見るの明を有せしめず。吾人の智能が形而上界に有する位置は吾人の肉體が自然界に有する位置と相同じ。

あらゆる物に限られ兩極間に所を維持する

が如き情態は人間諸種の能力にありて認めらる。吾人の官能は極端なるものを一も認識する能はず。高きに過ぐる強音は吾人を聾せしめ，強きに過ぐる光は眼を眩せしめ，遠きに過ぎまた近きに過ぐれば視る能はず，長きに過ぎ短きに過ぐる談話は意味を捉へ難く，多きに過ぐる時は眞理も吾人を驚倒せしむ。快樂も度を過ぐれば煩しく諧音の夥多なるは樂音として害あり，慈善も多きに過ぐる時は腹立たしく感ぜらる，吾人は償却し得る負債を有せむことを欲す。吾人は極端の熱を感ぜず，また極端の寒冷をも感覺せず。長所も過度なれば身に害あり，之に苦しむで却てその用ふ可きを思はず。若きに過ぎ老に過ぐれば知を妨ぐ，多きに過ぎ少きに過ぐれば教育も亦爾り。極度に達すれば萬物全く無きに等し，而して吾人彼に對して無なるが如し。物吾人に洩るゝか，否ざれば吾人彼に洩る。

斯くの如きは眞に吾人の情態なり。確固に知るとも不可能なれば亦た絕對に知らざるとも能はず。吾人は廣漠たる空間に在りて常に不安定にして浮動し，常に一端より他端に押遣られつゝあり。吾人が吾人を繫留し固定し置かんと思へる限界は常に吾人より逃げ吾人より去る。而して其一定限界に追從せんと欲するも彼や捕捉す可らず，吾人を滑りて永久に去る。一として吾人の爲に停止するものあらず。斯くの如きは自然の情態なれども最も吾人の欲求に反するものなり。吾等は安固なる位置を求め且無窮に聳ゆる一塔を築かんが爲に不朽の基礎を欲するや極めて切なり，然れども總て吾等の基礎は動搖し，大地は割れて深淵を作る。

されば確固不拔は求む可からず。吾人の理性は常に外面の無常によりて欺かる。何物と雖も兩無窮の間に限を定むる能はず。

以上よく了解して始めて人は自然が自己に與へたる位置に在りて晏如たることを得可しと信ず。此位置たる常に兩極端より距たり居るものなれば假令些少の知識を多く人間が有せりとも果して何の用ぞ。人之を有すといふと雖常に極より距たること無窮なるにあらずや，而して吾人生の連續假令十年を多く加ふと雖も，永久に到り及ばざること無限なるにあらずや。

これら無限の見にありては，あらゆる有限は同等なり。予は何故人が其想像を甲に置いて乙に置かざるかを了解し能はず。吾人をとつて有限に對し爲す唯一の比較は吾人をして悲しましむ。

若し人にして第一に自己を研究せんか，人は遠く行くとの如何に不可能なるかを知るに至らむ。焉ぞ一部を以て全部を知悉するを得んや。然れども少くとも自己と關係を有する部分丈けを知らむと希望するならむ。然れども世界の各部は各〻甲乙相互に關係を有するものにして，甲無くして乙を知る能はず，全部無くして一部をも知る可からざるなり。

例せば人に在りても，其知れる物と總て特種の關係を有す。乃ち身を容るゝ爲には場所を要し，生を續くるには時間を要し，生活するに運動を要し，身を組織するには原素を要し，身を養ふには熱と食物とを要し，呼吸するには空氣を要す。彼は光を見，五體を知覺す，斯く萬物何れも關係を有す。故に人間なるものを知らんと欲せば生存せむが爲に人が空氣を要するは何によりて然るかを知らざる可からず。而して空氣を知らんと欲せば何處にそが人の生命と交渉を有するかを究めざる可からず。火焰は空氣無くして存するものにあらず，故に甲を知る爲には乙を知らざる可からず。

故に萬物は原因なり，また原因するものなり，輔けられ輔くるものなり，間接にしてまた直接のものなり。而して萬有悉く自然無形の連鎖によりて最も距たり最も異なりたるも

のを聯結して相支持するに故に全部を知らずして一部を知る能はずといふ所以にして，同時に一部を知らずして全部を知る能はずと言ふ所以なり。

萬物の永遠は，永遠其自身に於て或は神に於て吾人の少繼續を驚嘆せしむ可し。自然の確固不變の不動は吾人の裡に行はるゝ絕えざる變化に比するとき同樣の結果を爲さん。

吾人をして萬有を知るに無能ならしむる所以の者は，物は單純にして吾人は其性相反する而して種を異にする肉と靈の二つより成立せるの事實なりとす。吾人の中にありて推理する部分は精神的部分より以外なりとするは不可能なり。而して吾人は單に肉より成立するものなりと主張するに及びて物を知るに一層の困難を感ぜしむ，是れ物質が物質を知るといふが如き程不可解の事あらざればなり。物質が如何にして自己を知るか，吾人には到底解す能はざることなり。

而して若し吾人にして單に物質なりとせば何事をも知る能はず，若し靈と肉とにより組織せらるとせば吾人は單なる物質，精神的事象，或は肉體的物體を完全に知る能はず。

これよりして凡そ哲學者なるものが物に對する觀念を混同し，物的事物を捉へて精神的のものとして語り，精神的事物を捉へて物的に語るが如きことを致す。渠等は大膽にも，肉體は下方に向ひ其中心を欲し，破壞を避け空虛を厭ふといひ，また自然は傾向，同情，反感等を有すといへど，これ等は凡て精神界に於てのみ存する現象なり。或は精神を語りて，之を或所に存在するものと考へ，或は甲より乙の位置に運動する性質を有するものゝ如く謂へど，これらは凡て物に於てのみ存することなり。

單純なる物の觀念を得ることの代りに吾人は吾人の性質を以てこれを染め，また吾人の觀ずるあらゆる單純の物を捉へて吾人の形骸を以て當嵌めんとす。

吾人に在りては萬物悉く靈と肉とにより成立せるを見ては誰か此混合を以て甚だ解し易きものと思はんや。人間は其自身にして自然界の最大不可思議のものなり。渠は肉體なるものを考へ得ず，精神に於ては益〻もつて然り，如何なるものも肉體の如く精神を以て結合し得る等の事は彌〻考ふる能はず。聖オーギユストの言葉に「精神が肉體に結合せらるゝ事情は人間に領解せらるゝものに非ず，而して然かもこれ人なり」と。

四十三　(B. 82+B. 83)

眞理を誤る者は第一に理性と感覺の爭是れなり。人は元來誤謬の主體にすぎず，神啓なくば解悟すべからず，何物も眞理を示すなし，總て我等を欺瞞す。理性と感覺は眞理を得るの二原則なりと雖眞摯の性を缺き且つ二者互に相欺くに至る感覺は誤れる外觀を以て理性を僞り而して理性に加へられたる此欺瞞は飜つて復感覺に歸り來る。理性の復讐なり。心胸の情火は感覺を亂りて虛僞の印象となる，彼等爭ふて詐り相欺かんとするなり。

四十四　(B. 84)

空想は小さき物を擴大し其妄想的評價を以て我等の心靈を充塞するに至る。而して自己の尺度に合はせて偉大なる物を縮小せしむ。彼等の神に就て語る場合の如き是れなり。

四十五　(B. 86)

妄想は我をして烏啼き，食を求めて發する其れを厭はしむ，妄想の力は大なり。我等は之を何事に利用すべきか。其の自然に起り來るといふが故を以て此力に從はざる可からざるか非ず，我等は其に反抗せんとす……

四十六　(B. 85)

最も強く吾人を拘束する者例へば財產の少きを匿さんとするが如きは多くは無意味の事に屬す。我等の想像を山の如く高くするも畢竟空華にすぎず，心一度空想より離るれば容

易く其空虛を悟るなり。

四十七 (B. 87)

「空想に依つて支配せらるゝ人より不幸なるはなし。」

四十八 (B. 88)

自己の描ける拙惡なる容貌に依つて恐怖をなすものは小兒なり。されど小兒に於て爾く弱かりし人が長じて強からんとする方法とは何ぞ。唯妄想を變ずる事のみ。進步に依つて成就する物は又進步に依つて消滅す。一たび弱かりし者は決して絕對に強かる能はず。彼は成人せり，彼は變りたりと云ふは無意味なり。人は常に同一なり。

四十九 (B. 89)

慣習は吾人の天性なり——信仰に慣るゝ者は其を信じ地獄を懼れざる能はず而して其他を信ぜず。君主の怖る可きを信ずるに慣れたる者は……されば數と空間と運動を觀るに慣れたる精神が其を信じて其他の何物をも信ぜざる事を誰か疑はんや。

五十 (B. 90)

「屢〻起れる出來事は其原因を知らざれども我等は驚かされず。未だ嘗て見ざる出來事は吾人に怪異の念を起さしむ。」「世には無稽を說くに甚だしく焦心する人あり」

五十一 (B. 91)

太陽の黑點——吾人は常に同一の結果の生ずるを見る時は明白も亦然かある可しと云ふ自然の必至を結論す，されど自然は屢〻吾人の意表に出で其固有の法則に從はざる事あり。

五十二 (B. 92)

吾人の自然律とするの處の物は慣習律に非ずして何ぞや。小兒が其父の慣習（例へば獸獵の如き）より受け來れるものに非ずして何ぞ。

異なれる慣習が我等に異なれる自然律を與ふることは經驗に依つて知らるゝ處なり。若し慣習に依つて消滅せざる自然律あらば又天性に反ける慣習，天性と第二の慣習に依つて消滅せざる自然律あるなり。之は性癖による。

五十三 (B. 93)

父母は小兒の自然的愛情の消滅せん事を憂ふ。然らばこの消滅せられ得る天性とは何物ぞや。慣習は第二の天性なり，そは第一の天性を滅却せしむ。されど此天性とは何ぞや，慣習は何故に天性たらざるか。余は懼る，慣習が第二の天性たると共に，天性は第一の慣習其者たらんことを。

五十四 (B. 94)

人間の天性は自然一切動物一切なり。天性たらざるものなく，天性にして消滅せざるものなし。

五十五 (B. 95)

記憶も喜悅も等しく感情なり。幾何學の命題も亦感情となる，理性は感情を自然的になし，而して又自然的感情は理性に依つて消滅すればなり。

五十六 (B. 96)

吾人が自然の結果を證明するに理性の運用を誤るに慣るゝ時は眞の原因の發見せられたる場合にも最早其を承認する能はざるに至る。緊縛の下に血管が何故膨脹するかの理由に對して血液の循環なりと云ふ說明が此適例たりしことあり。

五十七 (B. 97)

人生に最も重要なるは職業の選擇なり。されど偶然が其を支配す。慣習が左官兵卒屋根師を作るにすぎず。或人，立派なる屋根師かなと云ひ兵士を見て彼等は餘程の莫迦者なりと云ふ。他の者云ふ，戰より偉大なるはなし，兵士たらざる者は悉く人間の屑なりと。少年時代に此の一を褒め，他を誹るを聞くに慣れたる結果，人は其職業を選擇す。眞理を愛し狂愚を憎むは人間の自然なればなり，此語佳し，余をして感動せしむる所あり，人は其適用に於て誤るのみ。自然が單に人間を造るに

用ゐたる所の物を以て人は人間一切の境遇を作る，慣習の力は斯の如く大なり。國を擧げて左官たり國を擧げて兵士たるの所以なり。

人間の天性の劃一ならざる事は疑ふ可き所なし其の然るを致するものは慣習なり，慣習は天性を制御すればなり。されど時あつて天性が慣習を超越し境遇の善惡如何に拘らず人間の本性に歸らしむる事あり。

五十八 (B. 98)

錯誤に導く先入說——凡ての人が手段のみを講じて目的を思はざるを見るは歎はしき事なり。人各〻其境遇に處する方法如何を考ふれど境遇鄉土の選擇に至つては唯成り行きに任かすのみ。

何の理由もなく單に之は優れりと云ふ先入主あるが爲に其父母の轍を踐む「土耳古人」異端の徒無信仰者の多きを見るは憐む可き事なり。而して錠前屋兵卒等人の境遇を定むるものも是れなり。

蠻人がプロヴアンスを擬することを要せざるも亦是れに依る。

五十九 (B. 99)

意志行爲と他の行爲との間には一般的且つ根本的の差異あり。意志は信仰を得る機關の一なり。意志が信仰を作るに非ずと雖事物の眞僞は其を觀る方面に依つて分るればなり。選擇性を有する意志は智能をして自己の見るを欲せざる事物の性質を考ふる事なからしむ。斯くして智能は意思と共に俱に進み行き意志の命ずる處の方面を眺めんとして止まる。而して其觀る所に依つて事物の判斷をなすなり。

六十 (B. 100)

自愛心——人間の自愛心我執の性質を云はゞ自己のみを愛し自己のみを考ふるにあり。されど其愛する處の客體卽ち自我の缺陷と卑賤に滿ちたるを防ぐ能はざるを奈何。自己の大ならん事を欲して自己の卑小を見，自己の幸福ならん事を欲して自己の憐む可きを見，自己の完全ならん事を欲して自己の不完全に滿ちたるを見，自己が他人の愛敬の目標たらん事を欲して而して却て自己の缺點の偶〻彼等の嫌惡と侮蔑を估ふに過ぎざるを見る。

此矛盾に會ふや彼の心には想像に堪へたる不正背德の情念を生ず。其缺點を譴責し承服せしめんとする處の眞理に對して猛惡なる憎惡の念を懷くに至ればなり。出來得可くんば眞理を消滅せしめんとす。されど眞理其者を毀損する能はざるを以て自己及び他人の知識內に於て出來得る限り眞理を傷つけんとす。換言すれば自己の缺點の暴露さるゝを見るに堪へず，自己及び他人に其を覆ひ隱さんとする事これなり。

缺點の多きは良き事に非ざるや明かなり。されど之を掩はんとするは更に々々良からず，之を故意の眩惑と云ふ缺點を新に附け加ふればなり。我等は他人を欺くことを欲せず。されば彼等が眞の價値以上に我等に依つて評價せられん事を欲するを正當とする能はず。我等が他を欺き彼等に依つて評價せられん事を欲するを正當とする能はず。我等が他を欺き彼等に依つて價値以上に我等を評價せられんことを望むも亦決して正當の事と云ふ可らず。

欺かれば他人が我等の實際に有する缺點不德のみを見る場合にも彼等を不當なりとする能はず。其原因は我等に在りて彼等にあらざればなり。且つ彼等は吾人をして自己の缺點に關する不明を免れしむる事に於て一の善をなすが故なり。他人が其缺點を見て我等を蔑視するを怒る可からず。彼等が吾人のあるが儘を見，我等輕蔑せらる可きにして我等を輕蔑するは正當なからんや。

されど斯の如きは正義と公正に滿ちたる人の心より生ずる感情なり。全然之に反せる傾向を有する吾人自身にあつては何をか云ふ可き。我等は眞理と眞理を云ふ者を憎み，吾人に有利なる誤解をなす人を愛し而して吾人が實

際あるよりも以上に彼等に依つて評價せられん事を欲するは果して事實にあらざるなきか。

此所に此事に關して余を恐れしめたる一の證據あり。カトリックの教は自己の罪惡を何人にも無頓着に打ち開けよと強ゆるものに非ず。凡て他の者に其を匿し置く事を容るす。されど此例外に立つ唯一人あり。自己の心の底を露はして其人をして我等のあるがまゝを見せしめん事を命ずるなり。カトリツク教が我等の眞相を暴露す可きことを命ずるは世に唯此一人あるのみ。而して犯す可からざる秘密を其人に托して恰も何等もなかりしが如く其知識を藏せしむるなり。これより慈愛に富めるより溫和なる物を想像し得るや。然るに何ぞや此掟にすら猶嚴酷を覺ゆる迄爾かく人心は腐敗せり。殆んど全歐洲を擧げてカトリツク教會に反抗せしめたる主もなる理由の一は是れなり。

寧ろ萬人の眼前に於てなすを正當とすべき事を唯一人の眼前に於て爲せと命ずるをすら猶ほ不滿なりとする人々の心は如何に不正に且つ不條理極まりなきかな，然らば我等が他を欺くを正しとせんとするか。

眞理に對する嫌惡の情には種々の程度あり。されど何人にも幾分か必ず此心ありと云ふを得。是は自愛心と離る可からざるものなればなり。他人を譴責すべき必要ある人々をして彼等を憤怒せしめざらんが爲に強ゐて種々の迂回と方便を求めしむるものは此不快なる懷柔策なり。

其缺點を少くし其を寛容するが如き體を裝ひ讚辭と愛情尊重の表示を混ずる事を忘る可からず。凡て之れ等を以てして獨此投藥の自愛心に苦からざるを得る能はず。彼は出來得る限り少く，必ず嫌々ながら其藥を受くるも投藥者に對しては暗々の裡に惡感を懷く事往々あり。

之に依つて吾人より愛せらるゝ必要ある者は我等の厭ふ所たるを知れる干涉をなすを避けんとするに至る。斯くて我等の欲する如くに我等を取扱ふなり。我等眞理を憎めば人之を我等を隱くし，我等阿諛を好めば人我等に阿諛し，吾れ等欺かれんことを欲すれば人吾れ等を欺く。

世間に現はれたる富裕なる財產が我等をして益〻眞理より遠ざからしむる所以茲にあり。其好意を得る事最も必要にして其嫌惡を估ふ事最も危險なるが如き人を傷くるは彼等の甚しく懼るゝ所なればなり。或君主全歐の笑柄たることあらんも彼獨り其を知らざるを得可し，余は今更の如く驚かず。眞理を云ふは其を云はるゝ人には有要なり，されどそを云ふ者には不利益なり，彼等相憎むに至るが故なり。されば君主の左右に侍する者は其仕ふる所の君主の利益よりも寧ろ自己の其れを愛す。かゝれば彼等は自ら傷害を受くるに甘んじて君主に利益を獲せしめんとする覺悟を有せざるなり。

財產の多きに從つて此不幸の大きく且普通なる事は疑のなき所なり。されど少き財產を有する者も亦之を免るゝ能はず。他人に依つて己を愛せしむるは常に幾何かの利益を伴へばなり。

斯くして人生は永への眩惑なり。互に相欺き阿諛することのみ。我等の居らざる所に語るが如く我等の面前に於て我等を云ふ者あるなし。人と人の間の結合は此相互の欺瞞の上に構成せらるゝに過ぎず。彼の居らざる時其友の彼につきて語る所のものを知らば假令僞らざる邪念なき談話なりとも彼等の間の友情は最早存在し得ざるべし。

人は自己に對し他人に對して假相虛言僞善に外ならず。他人の彼に眞理を言ふ事を望まず，又他人に其を云ふを避く。正義と理智より爾かく遠ざかれる此等の性癖は凡て吾人の心情に於て自然の根柢を有するなり。

六十一 (B. 101)

余は若し凡ての人が互に他に就きて語る所のものを知る時は世に四人の友人のなからん事を信ぜんとす。世人が往々なす如く不謹慎なる談話が惹き起せる爭に觀て斯く考へざるを得ざるなり。

六十二 (B. 102)

他人の仲介によつて吾等に來る所の罪惡あり，そは幹を離れたる枝葉の如く暴亂す。

六十三 (B. 103)

アレキサンドルの貞廉の例は其泥醉の例が不節制者を作りたる程多くの清廉者を作らざりき。彼れ程有德ならざるも羞づ可きに有ず，彼れより不德なるも容るされ得可きが如し。

偉人の不德を已に見る時，人は全然常人の罪惡と異なるものあるを信す。されど偉人も亦罪惡を有するあるを思はず。我等は偉人が衆人と接觸する所の一端によりて彼と關聯す。彼れ等如何に偉大なりとも或部分に於ては人間の最も卑賤なる者と相聯結する所あればなり。彼等は空中に懸るに非ず。我等の社會を全然超脱する能はず。否，彼等は吾人より大なりともそは特に頭首の高く衆を拔きたるが爲のみ，其脚は吾人のと共に下にあり。同一の水平線にありて同一の地上に依立するなり。

此尖端をを以てすれば彼等と雖我等最小なる者小兒動物と等しく共に俱に卑かざるを得ず。

六十四 (B. 104)

情に驅られて或事を爲す時我等はその本務を忘れたり。斯くして或書籍に耽り他の事を爲さざる可からざる場合に猶其書を離れず。されど其本務を思ひ起せば或厭はしき事を爲すべく自から強ゐざるを得ず。此所に人は他にも爲すべき事ありと云ふ口實を設けて自から寛恕せんとす。人々の自己の本務に對する，多くは此類なり。

六十五 (B. 105)

或事物を他人の判斷に問はんとする時そを提供する如何なるかの方法によりて彼の判斷を亂さゞらんとする事の難さよ余は美なりとす，余は賤しむ可しとなすなど云はんか，人は想像によりて此判斷に落ち來るか然らざれば其反感を煽ふるに至るべし。何事をも云はざるを佳しとす。然る時人は自己の有するもの詳しくは其時彼の有したりしものを以て判斷す，而して我等の與り知らざる他の事情が彼に與へたらんものによりて斷ずべし。

されど我等何事をも云はざりしにせよ，其沈默も亦何等かの結果を生ぜずして止まんや。彼が我等に讀まんとして待ち設けたる註解と形容によりて，觀相師たる彼が我等の動作顏色又は聲の調子によりて忖度する處のものによりて此沈默も亦何物をか與ふるなり。

而して自己本來の根柢に立ちて惑はざる判斷を下さん事は斯の如く困難なり。寧ろ一歩進みて確固不動の判斷の殆んど世になき事を云はんか。

六十六 (B. 106)

他人を支配する情慾を知る時は其意を迎ふること容易なりされど人各〻妄想を有す。例へば幸福に關する理想に於てすら猶自己の幸福に反するが如き妄想を懷けり。是れ實に調子外づれの奇怪事に非ずや。

六十七 (B. 107)

天候と余が氣分は關聯する所なし，陰晴は自己胸中にあり，余が業務の成否すら又殆んど關せず。時としては自から運命に反して強行することあり。運命に打勝つ名譽は我をして其を打破するに愉快ならしめ而して反對に幸運は往々我を氣六ケし家たらしむ。

六十八 (B. 108)

人々其の語る所の事物に利害關係を有せざる場合にも彼等を必ず詐らざらものと斷定す可からず，何となれば世には唯詐らんが爲に詐る人あればなり。

六十九 (B. 109)

人健かなる時は病に處するの法を誇れど，一度疾病に冒されんか，愴惶として服藥す，不安に領せらるゝなり。健康時の遊行娛樂の欲情は疾病の拘束を受けて玆に消滅せざる能はず。自然は此の時其の狀態に適應せる欲情と希望を與ふ我等自ら作る所の恐怖ありて我等を動亂せしむる而已而して自然は與らず，之は吾人の有せざる狀態に於ける欲情を以て現在の狀態に結合せしむるが故なり。

自然は常に如何なる狀態に於ても，我等を不幸ならしむるを以て，希望は一層幸福なる境遇を想像して止まず。吾人の住せざる狀態の快樂を以て吾人現在の境遇に結合せしむるものなり。されど其の快樂を得る時我等之れが爲めに幸福を感ぜず，此の新しき境遇に相當せる更に他の欲望を生ず可ければなり。

此の一般的命題を少しく細に檢せざるべからず……

七十 (B. 110)

現在の快樂に慊らずとなし，而して來る可き快樂の空虛を覺らず，以て人心の不定となる。

七十一 (B. 111)

不定——人は人間に接するに在り來りの風琴に觸るゝ心を以てす。之は誠に風琴なりと雖奇怪にして變化し動搖して止まず，其の管は調整せる音階に從はざるものなり。

通常の樂器以外を知らざる者は是れの調子を整ふる能はざらん。先づ其の壓板(フウノユ)の在る處を知らざる可らず。

七十二 (B. 112)

物に種々の性質あり，精神に種々の傾向あり。精神に關する物にして複雜ならざるは無く，而して精神は常に何物に對しても簡單なる能はず，同一事物に就て或は泣き或は笑ふ事あるは是れが爲なり。

七十三 (B. 113)

不定と奇怪——自己の勞力のみに依つて生き而して「世界の最強國」を統治せんとするは兩立し難き事なり。此の調和を視るは獨り傳說中の土耳古大王のみか。

七十四 (B. 114)

變化は廣大なり，聲の調子步み振り咳嗽放濕逆噎(しやくり)の異なるが如く……葡萄の實を區別し葡萄酒を區別し而して產地を選び釀造を擇び，更に其の接穗を吟味す。啻に是れのみに止らんや。葡萄に相等しき二房を生ぜず，一房に等しき二粒を有せず。

予は同一事物に就て常に同一判斷を下す能はず自ら製作する物を自ら判斷するを得ず。是れを爲さんとせば畫家の爲す所に倣ひて自己を離るゝを要す，されど又遠きに過ぐ可からず。然らば如何程ぞ。唯推せよ。

七十五 (B. 115)

變化——神學は一科學なり，さらば如何なる程度迄科學なりや。人は一の生體なり，されど之を解剖せば頭たり心臟たり胃たり血管たり各種血管たり血管各部たり血液たり血液各漿たり。

一の都市一の郊野，遠く是れを望めば都市たり郊野たり。されど近づくに從つて之は家屋樹木瓦石枝葉雜草蟻及び蟻の脚と無限に分る。是れ等一切の物が都市郊野の名の下に包括せらるゝなり。

七十六 (B. 116)

思想——多は一にして一は多なり。人間思想の性質は幾何ぞ。其の作用に幾何ありや。而も人々動もすれば他の推奬する事物に奔らんとするは何の因緣ぞ。靴の踵は曲がり易し。

七十七 (B. 117)

靴の踵——「此の曲がれること哉，善き職人もあれかし，彼の兵士の勇しさよ。」我等の性向と境遇選擇の根源玆に在り。「なかなかの酒豪かな彼は多く酒を用ゐず，」人々をして禁酒家泥醉者兵士臆病者たらしむるは是

れなり。

七十八 (B. 118)

主たる才能は一切他の才能を制御す。

七十九 (B. 119)

自然は己を模倣す。善き地に蒔きたる種の發生するが如く善き心に樹えたる法則は繁茂す。數は空間を模するものなり，唯其の性を異にする耳。

一切の物皆同一の主に依つて導き造られたり，根と枝と果實，法則と原因結果。

八十 (B. 120)

自然は分化して模倣す，人爲は模倣して分化す。

八十一 (B. 121)

自然は常に同一事を繰返へす。年日時。空間も同樣なり。而して數は一より二を追ひ層々相屬す。斯の如くにして一種の無限無窮を生ず。是は決して無限無窮の存する事に非ず，されど有限の物の無限に繰り返へさるゝ事なり。されば予は思ふに無限のものは之を繰り返へす數以外に有るなしと。

八十二 (B. 122)

悲哀と論爭を醫するものは時なり，人は常に變化し復同一ならざればなり。惱れる者も惱らしめたる人も共に復曩日の彼等に非ず。是は恰も或人民の不快を估ひ，二三代を經てし後再びそを見るが如し。猶佛人たりと雖決して復同一に非ず。

八十三 (B. 123)

十年前の情人を猶愛する男あるまじ。思ふに女も變れり，男亦變れり。若かりしは昔，女今や老いたり。在りし頃の俤を保たば或は其の愛を繫ぐを得可けんか。

八十四 (B. 124)

人々事物を觀るに方面の異なる而已ならず，其の眼亦異なれり。我等同一の觀察を爲す因緣を有するなし。

八十五 (B. 125)

矛盾——人の性信じ易くして信じ難く，臆病にして大膽なり。

八十六 (B. 126)

人間を描寫せんか，曰く依賴と獨立の要求。

八十七 (B. 127)

人間の境涯は不定と倦怠と不安。

八十八 (B. 128)

職務の拘束を離れんとする所に倦怠あり。家庭に在りて樂しく暮らす人あらんか。途上に於て好める婦人を見，而して享樂の五六日を過し來りたりとせよ，再び其の職業に歸れる時家庭の復樂しからざるを見るなり。此れより普通の事なし。

八十九 (B. 129)

人の性は活動に在り，眞の休息は死なり。

九十 (B. 130)

動搖——自己の苦痛を訴ふる兵士勞働者あらば是れを何の所業もなき地位に放置せられよ。

九十一 (B. 131)

倦怠——所業なく所作なく情趣なく娛樂なき眞の休息に置かれたるより人間の堪へ難きはなし。自己の虛無自暴不完全依賴無氣力無意味を感ずるは此の時なり。倦怠憂鬱陰慘悲哀忿怒絕望時々に胸底より湧き來る可し。

九十二 (B. 132)

予は考ふるにセザールは世界征伏を企つるは餘りに老いたりき。此の樂はオウギユストかアレキサンドルかに相當せり，彼等は若かりき，之を止むるは難し。されどセザールは熟慮す可きに非ざりしか。

九十三 (B. 133)

似寄りたる二つの顏ありとせよ，其の一つを取る時は我等をして笑はしむる事なきも，之れを同時に併べ來らば其の類似を見て人必ず笑ふ可し。

九十四 (B. 134)

我等は畫家の事物を模寫せるを褒むるも而

も原物を讃美する事なし，何等の無意味ぞ。

九十五 (B. 135)

闘より悦ばるゝはなし，されど勝利其者に非ず。人は動物の闘爭を見るを愛すれど敗者を蹈んで氣負へる勝者を見るを好まず。勝利の結果に非ずとせば人々の見んと欲せしものは何ぞや。最後の近づける時は人々の既に飽ける時なり。遊戯に於て斯の如し，而して眞理の攻究に於ても亦然り。事を議するに當りても唯論爭を見るを欲するのみ，眞理の發見を期するに非ず，興味を以て注意せしめんとせば論爭の中より眞理の發現するを見せしめざる可らず。同様に感情に關しても二つの者の衝突扞格を見ざれば滿足せず，されど其の一の勝利を占むるや，是は既に蠻的興味を失へり。我等事物を攻究するに非ず，事物の穿鑿を求むるのみ。斯の如くにして演劇中何等の不安もなき圓滿なる場面は毫も其の價値なし，絶望的災厄，戀愛の熱狂又は壓迫の酷辣に遠く及ばず。

九十六 (B. 136)

小事は我等を慰さむ，我等小事に惱まさるゝが故なり。

九十七 (B. 137)

行住の管々しきを尋ぬるに當らず，其の娯樂を以て其の人を察するに足れり。

九十八 (B. 138)

人一度屋外に出づれば忽ち各種の職業成る。

九十九 (B. 139)

娯樂——予は嘗て人間の各種の不安危險苦痛戰爭抗論情火冒險惡計等に就て考へ，人間一切の不幸は皆一の事物より生じ來る事及び之は閑居平靜に堪へ得ざる事たるを知り得たり。衣食足る人にして我が家庭の生活を樂しむを知らば復攻城渡航を企つる能はざらん。金を擲つて軍職を購ふは其の都市を離れざるの無聊に堪へ得ざるが爲なり。

會合遊戯を求むるは獨り其の居を樂むを得ざるが爲なり。

百 (B. 139 続)

娯樂——されど更に進んで凡て是れ等の不幸の根本を探ぐる時は玆に拔き難き理由の存するを見るなり，之は脆弱なる人間自然の性情に根ざせるものにして一念是れに及べば復慰さめらる可くも非ず，哀れに痛ましきは我等の境涯なり。

人は常に何等かの境遇を想像す有らゆる財寶を聚め得たるとき世に最も美しく見ゆるは王侯の位なる可し，されど充ち足らひたる王位と雖他に娯樂なくば自己の在るが儘を考へ觀て其の幸福の變化なきに堪へ得ず，必ず來る可き叛亂病死に想到せん，斯くて王は嬉戯し娯樂する卑賤の民より遙に不幸ならんとす。

婦人が饒舌遊戯を好む所以，戰爭と高官の爾く熱望せらるゝ所以皆是れなり。されど實際玆に幸福の存するにも非ざれば博奕によりて贏ち得る金狩り暮らす兎に眞の幸福ありと想像するにも非ず，他人より與へらるゝあらば或は之を受けざる可し，人々の求むる所は之れ等の物の平凡なる使用に非ず，戰爭の危險職務の苦痛にも非ずして自己を忘れ自己を遊離せしむる慌忙(トヲカ)其者なり。

捕獲よりも角逐を好む理由玆に存す，喧騒動亂を愛し檻禁が怖しき處刑となり閑居の樂の解す可からざるものとなれる凡て之れに依る。……

百〇一 (B. 139 続)

斯くて我等自らを幸福ならしめんとして發明し得たる一切のものあり。而して之れに關して生賢しき考察を試み容易く購ひ得る兎を逐うて終日を遊び暮らす世人の無智を嗤はんとする者あれど之れ未だ人間の本性を見得ざる人なり。兎は我等をして死と災厄より免れしむるに非ずと雖其の狩獵は我等の心を此の厭はしき物より轉じて暫し樂しましめんとすなり。

百〇二 (B. 139 続)

されば靜に暮らせよと云ふは幸福に住めよと云ふに同じ而して又全く幸福なる境遇を得て無爲閑散の間にも何等不幸の題材を見ざれ考へざれと云ふに等し，是れ亦人間の本性を解せる言に非ず。

百〇三 (B. 139 続)

自己の境涯の自然に從ふ者は何事を忌むも閑居を忌むが如くならず，雜踏を求めて爲さゞる所なし。されど之は彼等が眞の幸福を知る本能を有せずと云ふ事に非ざるなり。……之を以て彼等を批難するは誤れり，彼等の缺點は只娛樂として動搖を求むる事に非ず，其の求むる物を得ば彼等を眞に幸福ならしむ可しとしてそを求むる點にあり。……

百〇四 (B. 139 続)

人は此の地位を得ば軈て樂しき平和生活に入らんなど想像すれど其の貪婪飽くなきの性を覺らず。眞實に休息を求めつゝあるを信じて誠は動亂を求むるあるのみ。

百〇五 (B. 139 続)

我等は絕えざる災厄の惱みよりして心窃に娛樂戶外の執務を求めんとする本能を有せり，而して又他の本能の潛在するありて我等の偉大なる根本性に依賴し，幸福は實に休息にありて動搖になき事を知らしむ。此の二つの矛盾せる本能より混亂せる企畫を生じ心の奥深く匿くされたり。騷擾によりて休息を求め，常に得る事なき滿足の來るあるを想はしめ，目下の困難に打ち勝たば軈て休息の戶は開かる可しと敎ゆるものは是れなり。

百〇六 (B. 139 続)

斯の如くにして一生涯は經過す。人は或障碍と鬪つて休息を求め而して其を脫却せる時休息は又堪へ難きものとなるなり。……

されば人は其構造上固有の狀態より倦怠ずべき理由なくして倦怠する程爾く不幸なり，而して又まことに倦怠すべき數千の原因に滿され乍ら球突き投球の如き瑣事に依りて慰さめらるゝ程爾く果敢なし。……

百〇七 (B. 139 続)

或人々は日々小事物を翫びて其の生を送り倦む事なからんとす。試に彼等に復賭事する勿れと云ふ條件の下に每朝其れ程の金を與へよ，汝は彼等を不幸ならしめんとする者なり。恐くは彼等の求むる所は博戯の樂にして利金にあらざるが爲なりと云ふ人あらんか，さらば賭物なくして博奕せしめよ，彼等は決して熱注する事なく忽ちにして倦怠せん。彼等の求むる所は遊戯のみに非ず，情火を煽ほるなき平坦の遊戯は惰氣あるのみ。賭事する勿れと云ふ條件の下に他人より與へらるゝを肯んぜざりし金を目標に立てゝ或は喜び或は怒り或は懼れ自ら熱注し刺戟せん事を要するなり小兒が自ら拙惡なる顏貌を描きて恐怖をなすと同樣に。……

百〇八 (B. 139 完)

首相たり總裁たる者と雖も早朝より各種の人間集り來りて自己に就きて考ふる時間を剩さゞらしむるに非ざれば何の異なる所なきなり。されば彼等が一旦其の職を失ひて田園に引退するや從僕財貨に於て缺くる所なきも陰鬱自廢に陷るを免れざるは何人も彼等自身に就きて考ふる事を妨ぐる者なきが爲なり。……

百〇九 (B. 141)

人々は球を投げ兎を逐ひて鬱を遣る，王侯の樂とする所も亦之れなり。

百十 (B. 145)

一の思想は吾人を覆ふに足れり我等は同時に二事物を考ふる能はず，而して我等を捉ふる物は俗衆に依つて來り神に依つて來らず。

百十一 (B. 146)

人は考へんが爲に造られたり，思想は其の威嚴と價値の全部なり而して其の本務は考ふ可きが如くに考ふるに在り。されば思想の順

序は自己と其の創造主と自己の終とに依りて始めざる可からず。

然らば世人の考ふる所は何ぞ。決して是れに非ず，舞蹈なり樂器なり歌謠遊戯なり，鬪はん事なり，君王たらん事なり，併も王の何たるか人の何たるかを考ふる事なし。

百十二 (B. 147)

我等は我等自身に有する固有の生活に滿足せずして他人の理想とする所の空想的生活に生きんと欲し，之を擬せん事を力む。絕えず此の架空的生活を保存し粉飾するに努力するも併も眞の生活を忘れたり。而して我等若し沈着寛大誠實等を有すれば汲々として之を發表し，是れ等の德を強ひて我等の他の生活に結び着け却て我等自身より分離せしめんとす，かくて我等は勇猛なりと云ふ世評を博せんが爲に好んで臆病者たる事あるなり。自己固有の生活の空虛二樣の生活を有せざれば滿足せざる事及び此の一を以て屢〻他に代ふる事あるを示して餘りあり。何故と云ふに自己の名譽を保たんが爲に死することを敢てせざる者は破廉恥漢と呼ばる可ければなり。

百十三 (B. 148)

我等は全世界の人々のみならず我等死後の人々によりてさへ著聞せられん事を欲する程爾く倨傲なり，併も其の淺薄なるや我等を圍繞する二三子の推奬に會うて忽ち滿足し樂しまさるゝなり。

百十四 (B. 149)

人は過ぎ行く村々の毀譽如何を顧ることなし，されど或期間此所に定住する必要ある時は軈て其の推奬を懸念し始じむさらば幾何の時を要するかと云ふに我等の儚なく淺間しき生に相當せる或時間にて足れり。

百十五 (B. 150)

虛榮心が人間の心情に於て有する根柢は深し，兵卒左官厨夫人足も亦其れ々々の自負を有し其れ々々の崇拜者を持たんことを欲するなり，哲學者も然り，筆を取つて虛榮心を攻擊する者は善く書き得たりと云ふ名譽を得ん事を欲し，そを讀む者は之を讀みたりと云ふ名譽を得ん事を望む，而して玆に斯くの如く書きたる予も亦恐くは其の欲望を有す可く，之を讀む人も亦恐くは……

百十六 (B. 151)

名譽——稱讚は少年時代より凡ての人を蠱毒す，善く言へること哉善く爲せる事哉聰明なる事哉等。

名譽と淡望の刺戟を與へられざるポールロアイヤルの小兒は疎懶に陷れり。

百十七 (B. 152)

好奇心は虛榮心に外ならず。多くの場合人は他人に語らんが爲に學ぶなり。何事も云はず何人にも語らざる覺悟にて獨り其を見ん事を樂しみに航海を企てたる者未だ嘗てあるなし。

百十八 (B. 153)

周圍の人々より稱讚せられんとする欲望——虛飾は不幸失敗の間にも猶我等を捉へて繹るさず，我等は他人の稱讚だに得らる可くば喜んで此の生を棄てんとすなり。

虛榮心——遊戯遊獵訪問喜劇名譽不朽の夢。

百十九 (B. 154)

予が友を有するは汝の利益の爲に非ず。

百二十 (B. 155)

誠の友は王侯貴人に取りても有益なり。之を得んが爲には何事をも爲さゞる可からず，彼は我等の善事を擧げ我等の居らざる所にも我等を辯護すべければなり。されど撰擇を誤らざれ，我等を褒むることありとも魯かなる友を得んが爲に全力を盡すは徒勞なり，彼等に權威なしされば自己の危きを覺る時は我等の善事を語らず，場合によりては却て我等を譏らんとすべし。

百二十一 (B. 156)

狂暴なる人々にありては武器を失へる時は

卽ち生存の理由を失へる時なり。彼れ等平和よりも死を愛し戰爭よりも死を愛す。

生を愛するは人々の自然にして其の力甚だ強きが如しと雖も各種の輿論は之れに打ち勝つを得。

百二十二 (B. 157)

我れ等の生を輕視し無意味に死し生存を厭ふ所に自家撞着あり。

百二十三 (B. 158)

人は名譽を得んが爲には何物を拋つをも辭せず死をすら厭はざらんとす，其の誘惑の強き斯の如し。

百二十四 (B. 159)

隱れたる善行は最も尊む可し，歷史上に於て斯の如き行爲を見出したる時我等の喜や太だし。されど是れ等も亦我れ等に知られたるより觀れば所詮全く匿されたるものと云ふ可からず。其の人之れ等を匿さんが爲に出來得る限り力めたりとするも早晩世に現る可き一端を遺せるあらば以て全體の價値を傷ふに至る，何故と云ふに我れ等の玆に最も美とする所は行爲其者よりも匿さん事を欲せりと云ふ點に在ればなり。

百二十五 (B. 165)

逆噫は凡ての精神作用及び業務をも一時沒却せしむるを得れど之れが爲に人間の卑小を結論する人あるなし，之は吾人の自由に任せざるものなればなり。よし人々自ら之を求むる事ありとも決して任意に發するを得ず而して此の場合其の目的とする所は物に在らずして他にあり，

されば逆噫は人間の弱點及び人間が之れに服從せる事を示す表象たらざるなり。

悲哀に惱めるは耻辱に非ず，されど快樂に惱めるは愧づ可し。之を解して悲哀は求めずして到り快樂は我れ等自ら求めて得るが故のみとなす可からず，何故と云ふに我れ等は屈辱の感なくして故意に悲哀を求めて之れに惱むことあるを得ればなり。然らば悲哀を求めて之れに惱むは何故名譽にして快樂を求めて之れに惱むは何故愧ぢざる可からざるか。此の理由は我れ等を誘惑し牽引せるは悲哀其者に非ず而して任意に悲哀を撰び來りて我れ等を主宰せしめん事を欲せるは我れ等自身なり，此の場合我れ等は物に對する主にして自己に服從せるものと云ふ可し，されど快樂の場合に於ては人は快樂其者に屈伏せるが故なり。されば人間の光榮たるものは主權主宰の外になく而して吾人の耻辱となす所のものは屈從あるのみ。

百二十六 (B. 161)

若し幸に人間の虛榮ほど明白なる事物が少しく世人に解せらるゝを得て今の時崇高偉大を求むるは愚なりと云ふ事が狷介奇異の言たるに至らば甚だいみじとせんかな。

百二十七 (B. 162)

人間の果敢なさを知らんと欲せば戀愛の原因と結果とを考ふるに如かず。戀愛の原因は思料すべからざる或物なり，されど其の結果は懼る可し。顧て再び認知するに堪へざる程些細なる此の或物が國土君王兵馬全世界を震蕩せしむ。

クレオパアトルの鼻よ今少し低かりしならんには渾球上の變化果して如何ありけむか。

百二十八 (B. 163)

空虛—戀愛の原因と結果，クレオパアトルの鼻，人間の果敢なさを記せよ。

百二十九 (B. 164)

世の虛榮を覺らざるは其の人自ら虛榮に滿ちたるが爲なりされば喧騷と娛樂と未來の夢とに溺れたる青年者に非ずとせば誰か之を觀得ざらんや。試に其の娛樂を除去せよ，彼れ等忽ち倦怠し乾涸し行きて何故とも識らなくに自己の空虛を感ずるに至らん。玆に荒凉の堪へ難きに逐はれて自己を考へ復慰めらる可きに非ざる時人は誠に不幸ならずとせんや。

百三十 (B. 165)

我は常に一切のものに就きて安心を求め來れり。若し我れ等の境遇を以て眞に幸福なるものとせば我れ等を幸福ならしめんが爲に娯樂を求むるの必要なかる可きなり。

百三十一 (B. 166+note)

苟安——死の何たるかを考へずして死するは危惧なきの死を考ふるより遙に容易なり。

「死刑の宣告を受けて悠揚迫らざるの態を裝ふ者は最後の場合に蔽眼布の懸る可きを恃めるなり。」

「死の恐怖は死其者よりも痛まし。」

百三十二 (B. 167)

人生の不幸は凡て是れに基因す，人々之を觀たるが爲に娯樂を求めんとするのみ。

百三十三 (B. 168)

人々自己の死と不幸と無識とを醫する能ばざるを以て各自を幸福にせんが爲には互に之れ等の問題に觸れざらん事を約したり。

百三十四 (B. 169)

之れ等多くの不幸を有するにも拘らず人は幸福ならん事を欲し幸福ならん事のみを欲し而して幸福ならん事を欲せざるを得ざるに至れり。されど其の方法は如何にすべきか。完全を望めば不死の生を得るを必要とすべけんも之は其の能ふ所に非ざるを以て復死に就て考ふるなからんとするなり。

百三十五 (B. 170)

幸福なる人程娯樂を解すること少し，古代の聖者の如き又は神の如き娯樂を有することなし。されど娯樂に依つて慰めらるゝを得るは幸福に非ざるなきか—然らず。

之は畢竟外部より來り千百偶然の事情によりて制御せられ弄せらるゝを以て災害は遂に免る可からず。

百三十六 (B. 171)

我れ等の不幸を慰む可き唯一のものは娯樂あるのみ，されど之は我れ等の不幸の中の最も大なるものなり。何故と云ふに娯樂は主として我れ等自身を考ふるなからしめ以て夢煙の裡に生を空費せしむればなり。之れなくば我れ等は倦怠を感ず可く而して倦怠を感ずればそを脱せんとして一層確實なる方法を求むるに努力すべし。されど娯樂は我れ等を樂しましめ無爲茫漠として死に逢着せしむるを奈何。

百三十七 (B. 172)

人は決して現在に依立する事なし。未來を豫想して其の來る事の遲きを喞ち只向行程を急がんとするに似たり而して他方に於ては過去を回想して其の過ぎ行きの餘りに早きを恨めり。我れ等のものに非ざる時の裡に彷徨し我れ等に屬する唯一の時を考へざる程思慮を失へり，既に無に歸せるものを念ふこと厚きも却て現存せる物を愴茫として過ぎ去らしむる程空虛けたり。之れ現在は常に我れ等に辛辣なるが故なり。其の痛みあるが故に自ら是れを匿くし其の甘きが爲に彼れの過ぎ行くを見ては悲しむ。我れ等は未來に依つて生きん事を求め，未だ我れ等の勢力の下に來らざる事物を如何に處理せんかを考ふるも其の時代は毫も我れ等の到達するを保證するなし。

百三十八 (B. 172 完)

人々自己の思想を吟味せば凡て過去と未來に歸着せざるものなきを見る可し。我れ等は殆んど現在を考へず，若し現在を考ふるあらば未來の處置に光明を得んが爲にせるものなり現在は決して人々の目的に非ず，過去と現在は手段なり，唯一の目的は常に未來にあり。斯の如くにして我れ等は生活するに非ず，生活せん事を企畫し希望するのみ。されば常に幸福ならん事を力めて決して幸福ならざるは實に免るゝ能はざる所なり。

百三十九 (B. 173)

彼れ等は日月の蝕は災厄を前兆するものなりと信じたり，之れ不幸は世の常にして頻々

として來れば往々其の豫言と合致することあるが爲なり。然るに日月の蝕が幸福を豫言すと云はゞ多く實際に外づるゝなり。彼れ等は甚だ稀有の天體の會合に非ざれば幸福の豫言を與へざらんとす。斯くして人々の豫測が多く當を失せざるを得るは悲しむべし。

百四十 (B. 174)

悲慘—サロモンとヨブは人類の不幸を最も善く知り最も善く語りたる者なり，一は最も幸福の身にして他は最も不幸に生れたりき，一は經驗に依りて快樂の賴み難きを知り他は不幸の實際を味へり。

百四十一 (B. 175)

多くの人々の中健全なる時も亦死に近づきつゝありと云ふ事を覺悟せる者は甚だ少し，而して死期に近づき乍ら尙身の健全を信じて將に來らんとする熱病將に發せんとする膿瘍を感ぜざる者多し。

百四十二 (B. 176)

クロムウエルは全基督教徒を壓服し王家の一族を滅亡せしめ自家の一族の永遠に榮えんことを希ひ而して自己の輸尿管に石粒の介在するなからんを欲せり。羅馬も其の脚下に慴へりされど彼も遂に小癍石を除く能はずして斃れ其の一族は湮滅して聞えず王家は玆に再び興れり。

百四十三 (B. 177)

三賓主——さきの英王波蘭土王瑞典女王の知遇を受けたる者にして世の恩惠と援助を一身に鍾め得たりと信ぜざりし人ありきや。されど榮華の夢今果敢なくも醒めたり。

百四十四 (B. 178)

遠き昔猶太の暴君ヘロードが如何に無辜の民を殺戮せるかは之れをマクローブに聞け。

百四十五 (B. 179)

ヘロードが虐殺せしめたる二歳以下の小兒の中には自己の幼兒も雜じれりと聞きてオウギユストの曰く，ヘロードの子たらんよりは寧ろ其の家豕たらん哉と。

百四十六 (B. 180)

偉人も小人も同一の出來事忿恚情欲を有すれど一は車輪の上部に立ち他は其の中軸に居るを以て同樣の震動を受くるも攪亂せらるゝの度を異にす。

百四十七 (B. 181)

我れ等一の事物に熱衷する時其の失敗に終れるを見れば必ず忿怒せざるなきは誠に不幸と云ふ可し。失敗は何事に就きても起るを得可く而して百千の事物は日夜此の失敗と憤懣を繰り返しつゝあるなり。幸運を歡び不幸に怒らざるを得る人は正しく此の秘訣を發見せる者ならんか，恒久不壞の活動を念とする事是れなり。

百四十八 (B. 182)

事業の非運に陷れる時猶正しき希望を棄つる事なく一部の成功を喜ぶと共に他の失敗に萎縮せざるを得る人は必ず此の事業の挫折に冷淡なる者と疑はる可し，されば彼れ等は自己の冷淡ならざる事を示さんが爲めに心にもなき希望を揭げて其の喜に堪へざるが如き態を裝ひ以て失敗より來れる憤恚を覆はんとするに汲々す。

百四十九 (B. 183)

若し或物を以て其の眼を蔽ひ前途を視るなからしめんか，復狐疑する事なくして斷崖をも奔らんとす，之れ我れ等の態なり。(第二章神なき人の不幸了)

第三章

百五十 (B. 184)

神を求むるに至らしむるの書

神を求めんとする人をして惑亂せしむる哲學者懷疑派獨斷論者の爲に其蒙を啓く。

百五十一 (B. 185)

一切に臨むに溫雅を以てする神の導とは，理性に依りて頭腦に，慈愛によりて情(こゝろ)心に，

宗教を植えんとするにあり。されど力又は威嚇に依りて頭腦と情心に宗教を植えんとせば宗教を與ふる事なく恐怖を置かんのみ。

百五十二 (B. 186)

「教へらるゝなく唯だ恐怖によりて導かれたる人は神の支配の暴虐を疑はん。」

百五十三 (B. 187)

人々は宗教を輕蔑し宗教を嫌惡し宗教の眞ならん事を懼る。こを醫せんとせば先づ宗教の理性に反せざる事を示さゞる可からず，次いで宗教の尊む可く敬す可く且つ愛す可きを教へ善人をして其眞ならん事を希求するに至らしめ而して最後に其眞なる事を示すを要す。

宗教は善く人を解せるが故に尊く，宗教は眞の幸福を約するが故に愛す可し。

百五十四 (B. 188)

常に物語對話に於ても宗教に慍れる者あるを見ば何が故に不平なりやと言ひ得ん事を欲す。

百五十五 (B. 189)

先づ信じ難き人を憐め，彼等は其境遇上誠に不幸の者なり。何等かの效果あるに非ざれば斯の如き人を罵る勿れ，そは彼等を害せんのぬ。

百五十六 (B. 190)

何物かを求めつゝある無神者を痛め，彼等は實に不幸ならずとせんや。されど無神者を以て誇となす人に對しては假借すべからず。

百五十七 (B. 191)

彼等他を誹らんとするならんか，誹らざる可からざるは誰ぞ。然も我等他を誹らず却て之を憐む。

百五十八 (B. 192)

ミルトンの頑強を非難するは嬾て神の譴責を受く可きを知るが故なり。

百五十九 (B. 193)

最も小なる物を嘲り最も大なる物を信ぜざる人々を如何にせば可ならんか。

百六十 (B. 194)

宗教を攻擊する前に先づ其攻擊する宗教の何たるかを知らざる可からず。若し此宗教が神を見る事明にして蔽ふ所なく，さながらの姿に於てそを現せりと誇るものならんには，斯く明白に神を示すもの世に一も見る能はずと云ふが其宗教を攻擊する事ともならん。されど宗教は斯く云はず，人々は闇の裡に彷徨ひ神は彼等の知識に匿されたり，聖書にも自ら條件を置ける神と記されたらずや，神は誠に神を求むる者をして己を知らしめんが爲に教會に於て感じやすき休徵を立てたれど全心を以て神を求むる者に非ざれば己を認め得ざるが如くに此休徵を蔽ひたりと云ふなり。されば彼等が內に懈り乍ら眞理を求めて到るざる所なしと爲し，己が心の闇黑を思はず世に神を示す物あらんやと云ひて教會を惡せんとするも只事の一面を見たる者にして偶〻宗教の說く所の誤らざるを證するのみ，顧て自ら何の益する所もある可からず。

宗教を攻擊せんとせば到る所全力を用ひて宗教を求め教會の教導にも從ひたれど毫も滿足を得る能はざりきと叫ばざる可からず，斯く言ひ得て初めて宗教の主張に反抗するを得可けん。されど予が之を云ふは斯く正當に叫び得る者なく何人も實際斯く力めたるなきを示さんとすなり。斯の如き精神狀態にある者が如何なる行動をなすかは人皆知れり。彼等は聖書二三章の講義に僅々數時間を費し信仰の正否に關する一二の質問を試みたる時は教を求むるに大努力をなしたりと信じ更に轉じて他に向ひ書籍と人に就きて求めたれど何の得る所もなかりきと傲語す。予は彼等に斯から怠慢の誠に容し難きを云はん。こは獨り緣なき二三子の爲のみならんや我等一切の人の爲に云ふなり。

百六十一 (B. 194 續)

心靈の不滅は我等の胸底を衝いて登る一大

義にして之に關し無頓着ならんとせば總ての情意を斷絶せざる可からず。永遠の幸福の希求すべきか希求すべからざるか，知覺と判斷を以て生活の方針を定むるは不可能なりや，此生を律して到達せんとする究竟目的は何たる可きや等によりて我等一切の行動一切の思想は全然別種の道を取らざる能はず。

斯くして我等の第一の利害第一の本務は此問題に就きて自ら明ならん事なり，凡ての行爲は皆之より出でんとす。予が未だ確信なき人々の間にも之を知らんが爲に全力を用ひつゝある者と之が爲に勞するなく考ふるなくして生活しつゝある者とを截然區別せんとするは全くこれが爲なり。

此疑惑を懷きて深く悲しみ最大の不幸茲にありとなし，こを脫せんが爲には何物をも辭せず，此思索を以て最先重要の務となせる人々に對しては予は唯同情あるのみ。されど生活の最後の目的を考へずして其生を送り，信賴すべき光明を自ら見出す能はずと云ふが故を以てこを他に求むるを懈り，更に進んで斯の如き暗憺たる說の單に人々の附加雷同より出でたるものなりや將又確乎として動かすべからざる根柢を有するものなりやをも檢せざる人々に對しては予は全く異れる方法を以て遇せんとす。

彼等自身と彼等の永遠と彼等の全存在とに關する事柄を爾く等閑に附するは我をして悲しましむるよりは我をして怒らしめ我をして驚かしめ我をして怖れしむ，こは予に取りては一の奇怪事なり。斯く云へばとて強ちに宗敎に歸依せる者の熱語とのみ見るべからず，世間的の利害よりするも自愛心よりするも人々は必ず此情念を有すべきを云ふものにして只凡庸の徒の見る所を見ば足れりとす。

此世に於て確固たる眞の滿足なく我等の快樂は凡て一時の空華に過ぎず併も我等の不幸は無限無際に續き死は二六時中念頭に往來し將に數年を出でずして我等を永遠の虛無か永遠の不幸かに投ぜざれば止まざらんとするは高識の人を俟たずして餘りに明けし。

斯の如く確實に斯の如く怖るべき者他にありや。我等は勇者に期待する所を以て敢て自ら行はん，されど世に最も美しき生涯に擬せられたる最後も亦是なり。こを念ひたる後，未來生を希求するに非ざれば此生に於て幸福なき事，彼岸に近づくに從ひて人は益〻幸福なる可き事，及び久遠の確信を有する人々の毫も不幸ならざると共に未來の光明を有せざる人々の決して幸福ならざる事を若し否定し得可くんば否定せよ。

此疑に住するは實に大不幸ならざるべからず，されど此疑を有する時攻究止まざるを其本務とす，疑うて求めざる者は不幸且つ不正なり。況んや疑を以て滿足し或は事々しく宣言し或は虛榮と談笑の資に供せんとする者の如きは其無法を形容すべき言葉を知らず。

百六十二 (B. 194 續)

斯の如き感情は何處より起り得べきや。絕望的悲慘のみを期待しながら何等の喜悅を見出し得るとするぞ。一歩も蹈み出し難き暗黑の中に立ちて猶誇るべき物ありと思へりや。理性を有する人々の間に斯かる思想の如何にして行はるゝを得るか。

『我は何者によりて此世に置かれたるかを知らず，世界とは何ぞ我とは何ぞ，我は一切の事物につきて恐しきまで無知なり，我が身體我が感覺我が精神と稱する物の何たるかを知るや，自己と一切とか考へしめ而して茲に予をして斯く言はしめつゝある我の一部分は抑も何物ぞ，我は他を知らざると共に又自己を知らざるなり。我は我を繞れる宇宙の怖る可き空間を見この廣漠たる延長上の一角に我なる者の膠着せるを見るも，我は何故此位置に置かれて他の位置に置かれざりしか無始無終の永遠時中我が生存に宛てられたる小時日

の何故此期間に定められて他の期間に定められざりしかは毫も解する能はず。人々到る所無限に逢着するのみ，我は此無限の内に圍まれてさながら一原子一影像なるかの如く只一瞬時に存在し一度去りて復歸る可からず。我の知り得る一切の者は我の嬾て死せざる可からざる事なり，されど我の最も知らざる者も亦この免るゝ能はざる死其者なり。我は我の何處より來れるを知らず又我の何處に往くべきかをも知らず，唯此世を離るゝ時は永劫の虛無か或は怒れる神の手かに落つ可きを知るのみ，併も永遠に我を托せんとするは此二の中の何れなるかを知らず。斯くて我が境涯は不安と沮喪に滿されたり。彼を見此を思ひ茲に予は早晩到來すべき者を考へ求むる事なくして我が生一切の日を送らんとするに至れり。恐くは我が疑惑も今後幾分か明にするを得可けんも最早そを求めんが爲に一擧手一投足の苦痛をも忍ぶを欲せず。從つて此憂を懷いて懊惱する人々を顧慮せず斷乎として怖るゝ所なく自己の道を行かん，行いて此一大事の冒險を試み，未來は如何にあり永遠の生は誠にもあれ唯從容として死の導くまゝに任ぜんのみ。』

百六十三 (B. 194 續)

此種の言を弄して憚らざる人を誰か其友とするを願はん，誰か其一身上の事件を彼に計らんとすべき，誰か其悲を彼に分たんと欲するぞ，要するに人類の生存に於て彼は何の用ありや。斯く沒條理の者を敵とし有するは實に宗教の名譽なり，彼等の反抗は宗教に些の危害を加へず却て其眞理を證明するのみ。何故と云ふに基督教の信仰は此二のものを認むるにあればなり，曰く人性の墮落と基督の贖罪。されば予は信ず，彼等は行爲の神聖によりて贖罪の眞理を證明する事なしとするも，爾く不自然なる情想によりて如何に人性の墮落せるかをいみじく示し得たりと。

百六十四 (B. 194 續)

人々に最も重大なるものは自己の生存狀態以外にあるべけんや，然も永遠の生より人々に怖れられたるものなし。されば其生存の斷滅に心を惱まさゞる者も不幸の永續を見ては忽ち周章狼狽せんとす。彼等は他の事物に於ては殆んど別人の觀あり。斯くて小事に關すれば彼等は甚だ銳敏に且つ小心翼々として遠慮し先見す一事件の失敗名譽の毀損等によりては連日連夜憤怒と失望に輾轉する程の者が死によりて是等の一切を失はんとするを知るも何の不安なく何の情を動かさるゝなし。小事に於ける此敏感と大事に對する此無感覺とを同一人の心中に見るを得るは誠に奇怪事ならずとせんや。了解し難き熱中と不可思議なる疎懶の交錯が彼等を支配する大勢力をなすなり。

百六十五 (B. 194 續)

斯の如き無信仰的精神狀態にあるを名譽となすには人間の性情に奇怪なる變動の行はれたるを要す，然らざれば何人も茲に止り得可きに非ず。されど實際に於て予は此種の人を見たること甚だ少からず，彼等の多くが模倣にして本來にあらざるを知らざりせば寧ろ吃驚すべかりしならん。美しき風習は世人を熱狂せしめざれば止まずと云ふを其儘に信じたる人々がこを桎梏の解除と呼びなし相率ゐて其風を趁はんとするなり。之によりて名譽を求めんとする事の如何に徒勞なるかを彼等に知らしむるは強ちに困難ならず。予は斷じて云ふ，こは決して名譽を得る所以に非ず，事物に關して所謂健全なる判斷を下し正直眞摯聰明を裝ひさながら賴もしき友たり得るかの如く己を信ぜしむるを以て成功の唯一の方法なりとする時めける人々に對し予は敢て斯く云はんとす。されば彼等が桎梏は除かれたり人間の行爲を支配する神なる者の存在を認めず人間を指導する唯一の主は我自身なり信賴

すべきは自己のみと叫ぶを聞くも我等に何の用ありや。斯くて彼等の信用を增し人生の行路に於て慰籍と訓導と援助を彼等に期待する者多しと考ふるや。我等の心靈は一陣の風一片の煙にだも如かずとなし得々として之を說かば我等を悅ばし得とするや。こは嬉々として吹張すべき物なりや，此世に於て最も悲慘なる說くに痛ましかるべき事ならざるか。

百六十六 (B. 194 續)

彼等若し眞面目に考へなば此事の誤謬にして爾く常識に反し徹頭徹尾誠心誠意を缺き而して彼等に從はんとする傾向を有する人々をして墮落せしむるよりも寧ろ矯正するの能力を有する事を自ら認め得べけん。宗敎を疑はしめたる自己の理性と情意に再び聽け，彼等は汝に事物の賤しむ可く賴む可からざるを敎へ，說く所の正反對を以て汝に示さん。恰も善し或人嘗て斯の如く言へり，汝等絕えず此種の言を弄せば却て予を變心せしむるに至らんかと。宜なり，誰か此憐む可き人々を友とし有するを見て自ら衷心に恐怖を感ぜざる者あらんや。

百六十七 (B. 194 續)

自己の感情を僞り自然の性を矯めて最も頑迷なる者と呼ばれんとする人々は誠に不幸ならざる可からず。一の光明をも認めざるを胸底に於て悲しむあらばそを匿す勿れ，此宣言は必ずしも恥辱に非ず。恥づ可きは其悲を有せざる事のみ。精神の軟弱を批難す可きは神なき人の不幸の何たるかを知らざるに越すものなし。情意の惡傾向を示すは久遠の聖約の眞なるを希はざるに優るものなし。

神を冒瀆するより卑劣なるものなし。之等の邪曲は生得誠に惡しき者の手に委し眞に堪へ得る所なるかを見せしめよ，基督敎徒たるを得ずともせめて誠實の人たれ，而して條理に戾らざる人と呼び得るは次の二種類に過ぎざるを知れ，

曰く神を認めたるが故に全心情を傾けて之に仕ふる人々，曰く未だ神を知らざるが故に全心情を以て之を求めつゝある人々。

百六十八 (B. 194 完)

されど神を知らず神を求めずして生活する人々は他人の顧慮に値せざると共に又自ら顧慮するにも値せざる程の人間と知れ，彼等を賤しめず其狂暴に放任せざらんとせば彼等の蔑視せる宗敎の全慈愛心を有せざる可からず。

さは云へ此宗敎は我等に彼等の生存する限り絕えずそを憂ひ神の惠の彼等を照す能はざるかを見彼等とても早晩尊き信仰に滿さるゝの日ある可く我等とても彼等の迷蒙に墮つる事なしとせざるを信ぜよと命ずるが故に，身を彼等の地位に置かば他人に求めんと欲する物の何たるかを考へて之を彼等に施し自己を憐れむの情を起さしめ光明を見出さんとして假令幾步にてもよし立つて求むるに至らしむるを要す。彼等が他に於て無用に費す時間の幾分を割きて此講演に與ふる心なきか，如何なる惡感を懷いて來るとも恐くは何物かを得可し，少く共多くを失ふ事なからんに。眞理を求めんとする誠の要求と熱情を有して來る人々は希くは滿足を得よ尊き宗敎の證明に服せよ，予は汝等を待てり……

百六十九 (B. 195)

基督敎の證明に入る前に身邊に差迫れる人生の最大事の眞相を究めずして平然と生活する人々の不正を曝露するの必要ありと信ず。

凡ての迷蒙中こは無知狂暴の最も甚だしきものにして常識と自然の性情より見るも容易く解脫し得可きが如し。

何故と云ふに如何なる資性を有するとも此生は只一瞬時に過ぎずして死は永遠なる可く，されば我等の行爲と思考は此永遠の狀態の如何なるかによりて別種の途を取らざるを得ず而して究竟目的の眞意義を究めざれば知覺と判斷を以てするも我等の生活方針を規定する

事の不可能なるは毫も疑を容れざる所なればなり。

之より見やすきものあらんや，理性の各法則に依れば人間の行爲は他の途を取らざる限り不條理極まりなからんとす。されば生存の最後の目的を考へずして生活し反省もなく不安もなく自己の性向と欲情の導くまゝに任かせ永遠を考へざれば永遠を滅却し得るかの如くに思ひなし只此瞬間を享樂するに汲々たる人々を如何に判斷すべきかは自ら明ならんのみ。

さもあれ此永遠を否定する能はず，死は其扉を開かんとして二六時中彼等を脅かし驚て恐る可き必然に逢着せしめざれば止まざらんとす，併も其行く所の永劫の虚無か或は永劫の苦惱たるかは彼等知ることなし。

百七十 (B. 195 完)

玆に由々しき未來の疑問あり，彼等は將に永劫の不幸に陷らんとすなり。されど之に關して彼等はさながら心を勞する價値なき物となせるが如くに輕々しく衆人より得來れる說と深く匿くされたるも確固たる根柢を有する說の何れが正しきかをも檢せず。斯くて彼等は事物の眞僞を辨へず神の證明の有力なるか將又薄弱なるかをも知らず。證徵の眼前に懸るあるもそを見るを肯ぜず，此無知を以て相率ゐて不幸に陷るに足る有らゆる事を行ひ死に逢着して自ら實驗をなさんとし，且つ此狀態に太だ滿足して之を公言し遂には一種の誇となすに至れり。此一大事を眞面目に考へて斯かる放埒なる行動に恐怖を感ぜざる者あるべきか。

此無知に安んずるは一の奇怪事なり，斯の如き生を送る者に其無法と愚昧を摘發して自らそを感じ打破せんとするに至らしめざる可からず。暗黑なる生活を擇び復光明を求めざらんとせる時人々の如何なる理由を有するかを見よ。彼等曰く，予は知らずと……

百七十一 (B. 196)

人々は感性を缺けり，感性を以て自己の友とする者なからんとす。

百七十二 (B. 197)

利害關係ある事物を蔑視するまで無感覺となり我等に最も切實なる點を感ずる能はざるに至れり。

百七十三 (B. 198)

小事に對する人間の鋭感と大事に關する無感覺とは奇怪なる本末顚倒を示せり。

百七十四 (B. 199)

死刑の宣告を受けて珠數繫ぎにせられたる一隊の人を想像せよ，其內の幾人かは日々他の見る前に於て屠り行かれ，殘れる者は友の運命を見て我身の狀態を知り絕望と悲哀に滿てる眼をもて互に見交しつゝ自己の順番の來るを待てり。斯の如きが人間の境涯の縮圖なり。

百七十五 (B. 200)

牢獄に投ぜられたる人が如何なる判決の下されたるかを知らざるも只一時間を經過せばそを知るを得可く而して與へられたる判決を知らば此間に取消をなさしむるを得るものとせば，此時間を判決の與へられたるか否かを知るに用ひずして骨牌戲に費さんは人間の本性に反せり。

されば運命の決定の近づけるを憂ひずして快樂の生を送るも亦自然に非ず奇怪事なり。玆に人々は神の手を見て悶絕せざらんを懼る。

斯くて神を求むる人の熱誠が其の存在を證明するのみならず，神を求めざる人の迷蒙も暗に神の存在を證するに非ずや。

百七十六 (B. 201)

人々の間の有らゆる非難は悉く自己に向つて放ちたる矢たるのみ，宗教に達するものなし。無神者の云ふ所凡て然り……

百七十七 (B. 202)

「自己の信仰なきを見て樂しまざる人に會ひ

ては神の未だ光明を與へざるを知れど其他の人を見ては却て彼等を盲目にする或神の存するに非ざるやを疑ふ。」

百七十八 (B. 203)

瑣事の惑溺——情懷の傷つかざらんを欲せば人生は只八日間に限られたるが如くに行動せよ。

百七十九 (B. 204)

既に人生の八日間を與へざる可からずとせば又其全生涯を之に捧げざる可からず。

百八十 (B. 205)

我生の小期間と其の前後に繫がれる永劫の時を思ひ我周圍に見る小空間と我に知られず又我を知らざる無限廣漠の空間を考ふる時，我は我生の此所に斯の如きを見て自ら驚き恐れざる能はず，何となれば我は何故此所に置かれて彼所に置かれず何故此時に生れて彼時に生れざりしかの理由を知らざればなり。我を此所に置けるは誰ぞ。何者の命令と指導によりて此時此場所は我に定められたりしか。過ぎ行く日の驛亭の記憶。

百八十一 (B. 206)

此無限の空間の永劫の沈默は我を懼れしむ。

百八十二 (B. 207)

我等に知られざる領域幾何ぞ。

百八十三 (B. 208)

我知識は何故斯く限られたりや。我軀幹は如何。我生命は僅に百年にして千年ならざるは何ぞ。斯の如きの生斯の如きの諸を我に與へたる自然の理由は抑も何ぞ，無限無際の世界に於て特に此生を擇んで他の生を與へざるの理由ありや。何物か是を捨てゝ他を欲せしめざるありや。

百八十四 (B. 209)

汝の主人より愛せられ悅ばれなば汝の奴隷たる事減じたりとするか。非ず只幸福なる奴隷たるのみ。汝を愛撫する主人は軈て汝を撲たんとすべし。

百八十五 (B. 210)

人生の劇は他の部分に於て如何に美なりとも最終の幕は必ず悲慘なり，人は地を以て其頭を撲たざれば止まず，

斯くて永遠の幕垂る。

百八十六 (B. 211)

我等は同胞の小社會に安んじ樂しむも彼等の愍むべく無氣力なるは我等と同樣にして何の援助も期待す可からず，人は孤獨にて死に行くなり。されば自己只一人なるかの如く行動するを要す，斯くても猶高樓を築かんとする者ありや。狐疑する所なく只管に眞理を求めんとすべし，こを欲せざるは眞理の探求よりも人々の褒貶を重んずるが故なり。

百八十七 (B. 212)

流轉——人間の有する一切の物の頽移するを知るは寒心すべき事ならずや。

百八十八 (B. 213)

我等と地獄若しくは天國との間に立つ者は生活あるのみ，併も此生や世に於て最も脆弱なるものなり。

百八十九 (B. 214)

殃を以て誇となすは不法も亦甚だし。

百九十 (B. 215)

死を懼るゝは死の苦痛を怖るゝに非ず，我等は人たらざる可からざればなり。

二百 (B. 216)

用意なきの死を懼るゝのみ，懺悔僧が偉人の下に集るは是が爲なり。

二百一 (B. 217)

こは相續人が其家の證書に對するが如し，何ぞ僞なるを得んやと云ひてそを深く吟味するを怠らんや。

二百二 (B. 218)

コペルニツクの說を推究せざるもよし，心靈の滅不滅を考ふるは全生涯に大切なり。

二百十九 (B. 219)

心靈の滅か不滅かによりて道德に根本的の

變動を來すべきは疑ふ所なし。然るに哲學者は多く之を無視して其道德說を立て來れり，彼等の論議は一時の糊塗のみ。基督敎の傾を有せるはプラトン。か

二百二十 (B. 220)

心靈の滅不滅を考へざる哲學者の空虛。モンテーニユが示せる彼等のデイレムマの虛僞を見よ，曰く心靈滅すべきか，さらば何の苦痛もなけん，不滅なる可きか，さらば改造せられんとすらんと。

二百二十一 (B. 221)

無神者は事物を明確に說明するを要す，然らざれば心靈の物質的なる事は充分明なるべからず。

二百二十二 (B. 222)

無神者に問ふ，人は復活し能はずとは如何なる理由に依るや。新に生るゝと復活すると，未だ嘗て存在せざりし者が生じ來ると一度存在せし者が猶存續するとは何れが困難なりや再生は新生よりも難きや。我等は習慣によりて此一を容易なりとし他を不可能事なりとす，淺薄なる判斷の方法かな。

何故處女は子を產む能力なきか。雌雞は雄雞なくて卵を作らざるか。外部より見て雌雞の卵と雄雞の卵を區別する人ありや。雌雞は雄雞の如く胚種を作る能はずとは何人が云へりや。

二百二十三 (B. 223)

復活と聖母の懷胎に反對する彼等の根據は何ぞ。人若しくは動物を產出するとそを再生するとは何れが困難なりとするぞ。而して彼等が動物の或種屬をも見たることなしとするも配偶者なくして甲より乙の生ずるあるを想ふ能はざる可きか。

二百二十四 (B. 224)

予は此暗愚を憎む。經典を眞なりとし基督を神なりとするも其所に何等の困難ありや。

二百二十五 (B. 225)

無神論は才智の力を示せり，されど只或程度までの事に過ぎず。

二百二十六 (B. 226)

理性に從ふと公言せる不信者は理性に於て異常なる力を有せざる可からず。さて彼等の云ふ所は如何。曰く，我等は人間も動物も基督敎徒も異端の徒も皆同樣に死し同樣に生るゝを見たらずや，彼等にも彼等の宗敎祭祀豫言者聖者博學者等あるなりと。

汝等眞理を知らん事を希はざれば玆に止まりて安んぜよ。されど全心を以て眞理を知らん事を欲せばこは未だ充分ならず，更に精しく吟味せよ。單に知識上の問題とせば之にても足るべきも我等は一切を以て進み行くなり。此暗黑を理解する能はざるかを宗敎に問け，恐くはそを敎えられん。

二百二十七 (B. 227)

「我は何事を爲すべきか，到る所只暗黑を見るのみ。我は我を無たりと信ずべきか，將又我を神たりと信ずべきか。萬物は轉變して互に代謝す。」汝等誤れり……

二百二十八 (B. 228+B. 229)

無神者答へて云ふ——「されど我等に光明なし，我は斯の如く觀て此所に惱めり。四顧只暗黑あるのみ。自然が我に與ふる物悉く不安疑惑の材たらざるはなし。若し神を表示する何物をも見ざれば我は斷じて神を否定せん，若し到る所に創造者の象徵を見るを得ば我は安んじて信仰に投ぜん。されど否定せんには餘りに多く肯定せんには餘りに少きを見て我は悲しむ可き狀態に陷れり，若し世を支持せる神あらば明白なる象徵を示されよ而して若し自然の與ふる象徵が誤謬ならば全然そを除去せられよとは予が幾度か願へる所なるぞ，一切を語るか然らざれば何物をも示さゞれ，さらば予は取る可き道を定め得べけん。現在の有樣に於ては我は我の何たるか何を爲すべきかを知らず，我が境涯も我が本務も共に知

る由なし。我が心眞の幸福の何處にあるかを求めて止まず，予は永劫の生の爲には何物をも惜しまざらん。

予は容易き信仰を得て安逸に生活する人々を見ては嫉妬を感ず，然かも彼等は本來の智能を誤用せるが如し，予はこを異なれる方法に於て用ひんとす。」

二百二十九 (B. 230)

「神は存在するやが不可知なると共に神は存在せざるやも亦不可知なり。心靈は肉體と共にありや或は我等は心靈を有せざるや，世界は創造せられたりや或は創造せられざりしや，根本的の罪惡なるものありや或は根本的の罪惡なきや等は皆解すべからず。」

二百三十 (B. 231)

問ふ，特種の性情なき神の無限なる事を不可能なりと信ずるや。——然り。——さらば汝に無限にして且つ不可分なる物を見せしめん。こは無限の速度を以て到る所に移動する一の點なり，何故と云ふに此點は凡ての位地に於て一なると共に各所に於ては全一切なればなり。

從來不可能に見えたる自然の此結果が汝をして汝の未だ知らざる他の物の存在し得る事を知らしめよ。汝の學習を以て最早學ぶ可き何物も存せずと云ふ結論を引き出す勿れ，猶學ぶ可き物無限にありと知れ。

二百三十一 (B. 232)

無限の運動，凡ての物を充塞する點，靜止の時間，質量なく不可分にして且つ盡くる無きの無限。

二百三十二 (B. 233)

無限と無。——心靈は肉體の中に投ぜられて此所に數と時間と空間を見たり。斯くて其中に於て推理し之を自然又は必至と名附け而して他の事物を信ずる能はざるに至れり。

一個體を以て無限に加ふるも毫もそを增加せしめず，無限の尺度に一インチをも加ふる事なし。有限は無限の前に消滅し純乎たる無となる。神の前に於ける我等の知力，神の無私に對する我等の正義も亦同樣なり。されど神の正義と我等のそれとの懸隔は個體と無限に於けるが如く爾く大ならず。

神の正義は其慈悲と共に廣大なるべし。さあれ墮地獄者に對する正義は撰ばれたる人に對する慈悲よりも狹く且つ感動せしむる事少かるべきなり。

我等は或無限の存するを知るも其本性を知らず。數を有限なりとするは誤なる事を知る，されば數に一の無限の存するは眞なり。然れども我等は數の何たるかを知らず，眞の數を奇數なりとするも偶數なりとするも共に誤れり，何故と云ふに之に一を加ふるも決して其性質を變ぜず依然として一の數たり，而して凡ての數は偶數なるか或は又奇數なればなり。斯の如くにして我等は神の何たるかを知らざるも善く其存在を認め得べし。

多くの物の眞ならざるを見るが中に一の本體的眞理も存せざるや。

我等は有限の物の存在と其性質とを知る，我々自身も有限にして同樣の延長を有するが故なり。我等は無限の存在を知つて其本性を知らず，無限は我等の如く延長を有するも限界を有せざるが爲なり。されど我等は神の存在も其本性も知らず，神は延長もなく限界もなきが故なり。

然れども我等は信仰に依つて彼の存在を知り，榮光(グロアール)に依つて其本性を知らんとす。或物の本性を知らざるも善く其存在を認め得るは予の既に說ける所なり。

更に通有の方面より觀て說明の步を進めんか。

神の存在は無限の不可解なり，彼は性情なく限界なく我等と何の交涉をも有せざるに依る。されば我等は神の存在するか或は神の何たかるを知る能はず。斯の如くなるに於て誰

か此疑問を解決せんとを敢て試みんとする者ぞ。こは彼と何の關係をも有せざる我等の責に非ざるなり。

斯かれば彼等の信仰の理由を示す能はざる基督敎徒，理由を示す能はざる宗敎を奉じて之を宣言する彼等を誰か非難せんとするや。彼等はそを世人に曝露して自ら此事の恩なりやを問へり，而して汝等は彼等が其證明を與へざるを喞てり。彼等がそを證明するを得ば如何ぞ口を緘すべき。證明を與へざるは理知を失はざるが爲なり。

「善し，こは斯の如き信仰を宣言せる人々を恕し理性に依らずと云ふ非難を免れしむるを得るも未だ其信仰を他より受け來れる人々を容るすに足らず。」——さらば我等に此點を吟味して神は存せるか或は存せざるかを決せん。汝等は何れに傾かんとするや。理性は此所に何物をも決定する能はず，無限の混沌ありて我等を隔てり。此無限距離の終極に於て一の賭事行はれ貨幣の表裏二面を現ぜんとす。汝等は何れに賭けんとするか。理性によりては甲も乙も生ずる能はず，二者の何れをも肯定するを得ざるなり。

されば其一を撰べる人々に對し虛僞呼ばはりを爲す勿れ，汝等は何れをも知らざるに非ずや。——「否，予は此撰擇と云はず彼の撰擇と云はず只一を擇べる事を彼等に非難せんとす何故とならば十字架を取れる者も他を撰べる者も其の過たるに於ては二者同樣なるが爲なり，決定せざるを正しとすべし。

然り，されど今や決斷せざる可からず，こは自ら求むる所に非ざるも汝は既に船を出せり。何れを取らんとするや。

附記．上に掲げた資料の中の，明らかに誤植と考えられる箇所を次のように校訂しておくことにする。

頁	行	原　文	校　訂
104 左	7	触るれは	触れるは
111 左	26	此尖端をを以て	此尖端を以て
111 右	36	詐らざらもの	詐らざるもの
115 左	36—37	倦怠ずべき	倦怠すべき
120 左	23—24	害せんのぬ。	害せんのみ。
120 右	15	到るざる	到らざる
121 左	22	付加雷同	付和雷同
127 右	37—38	神の何たかるを	神の何たるかを

なお，120 頁左 34 行の《ミルトン》は，《Pensées》の原文では Miton であるが，これは誤植ではなく，Miton と Milton が混同されたのであろう。　（広田昌義　記）